

まこと、ビーバースカウトになる

作 浜嶋鉦一郎

プロローグ

子供たちは、生まれながらにして自分で考える力をもっている。また、親からの指導を受け入れて成長していく。子供には、自分で自主的に考えることと、親が子供たちを体力的にも精神的にもうまく成長させるための環境を作ってあげることが重要である。ボーイスカウトは生涯教育である。子供から大人になるまでの教育を受け、青年になってからは、指導者としての研修を受け、自分が指導者として子供たちを教育をすることで成長していく。もちろん大人になっても経験豊富なリーダーからアドバイスを受け、試行錯誤でさらに成長する。スカウトを教育するための基本的な考えは、思いやりがあり、いつも感謝の心を持つ子供を育てることを目標としていることである。

本書は、ボーイスカウト活動においてリーダーたちが行うさりげない教育指導に対して子供たちが主体性を持って活発に活動する様子を紹介する。

では、まことの登場である。

まことは、小学1年生になり、服部緑地公園で開催されたボーイスカウト豊中第2団の「グルメハンター」のイベントに参加した。この体験が気に入って、まことはビーバースカウトになることにした。

まことのお母さんは、まことがビーバー隊のスカウトになる入隊式が思ったより厳粛な雰囲気で行われたことに感動した。

厳かな曲が流れる中で、まことはビーバー隊隊長と向かい合った。

隊長に向かって、「なかまとなかよくすること」と「3つの目標」を守る「やくそく」をした。はっきりとした声が会場に響き、全員から「おー」という言葉とともに祝福の拍手が贈られた。このビーバースカウトの「やくそく」は、自分自身への約束で、自分がこれから「3つの目標」をできるように頑張るぞという意味である。でも、まことはその意味をまだ理解していない。

隊長は、上気したまことの顔を見ながら、新しいネッカチーフを首につけ、ビーバーキャップを頭にかぶせた。まことは新しい制服に包まれ、ビーバースカウトに変身した。ここから、家族とともに楽しいボーイスカウト生活が始まる。

ビーバー隊の指導者たちは、楽しく遊ぶ活動を通じて、すべてのスカウトが、「やくそく」をした自分の目標に自然に近づけるように導いていくのだ。

登場人物

ビーバースカウトと家族

山本 まこと：小学1年生 新入 主人公

木村 ひとみ：小学1年生 新入

原田 けいこ：小学1年生

伊藤 たかし：小学2年生

山田 けいた：小学2年生

まこと君のお母さん

まこと君のお父さん

けいこちゃんのお母さん

指導者

白木隊長（27歳）ビーバー隊、隊長3年目

下北副長（21歳）：ビーバー隊、富士スカウト

藤橋副長（53歳）：ビーバー隊、副団委員長、元ボーイ隊隊長、元カブ隊隊長

吉川団委員（66歳）：団委員、元ビーバー隊隊長、ビーバー隊専属指導者

川谷副長：カブ隊、ベンチャー隊員の保護者リーダー

清家デンリーダー：カブ隊、カブ隊員の保護者リーダー

内田隊長（23歳）：ボーイ隊、隊長2年目、元ボーイ隊副長

吉川副長（23歳）：ボーイ隊、前ボーイ隊隊長、富士スカウト、内田隊長と同期

坂本副長（21歳）：ボーイ隊、下北副長と同期

高井隊長（42歳）：ベンチャー隊、元ボーイ隊隊長

間瀬隊長（41歳）：ローバー隊、元ボーイ隊隊長

浜嶋団委員長（65才）：団委員、元ボーイ隊副長、前カブ隊隊長、ビーバー隊専属指導者

加藤育成会長（64歳）：団委員

寺田副育成会長（67歳）：団委員、前団委員長

目 次

プロローグ

第1話 まこと、「グルメハンター」の魅力に惹かれた	7
第2話 まこと、ビーバースカウトになる	64
第3話 箕面の滝で自然とのふれあい体験	77
第4話 初谷溪谷でドイツスカウトと遊ぶ	112
第5話 新たな挑戦、朝の挨拶はグッモーニン	136
エピローグ	166

第1話 まこと、「グルメハンター」の魅力に惹かれた

まこととボーイスカウトの出会いに戻って話を始めよう。

まことは、この春、小学校に入学し1年生としての楽しい生活を始めたばかりだ。

入学式から2、3日経った日のことだった。

まことは、家に帰ると自分の部屋でランドセルの中から学校でもらったちらしを急いで取り出して、大きな声を出しながらお母さんのいる台所に走った。

「お母さん、お母さん！」

お母さんは、洗いものをしながら、「何よ、そんな声を出して」とまことの顔を見た。

「ああ、お母さん、今日おもしろいちらしを貰ったよ！ 見て見て、早く見て！」

真剣な眼差しで差し出されたちらしには、こんなことが書かれてあった。

～ 親子で一緒に！ 「グルメハンター」 ～
～ 服部緑地公園内のポイントをめぐり、 ～
～ なかまたちといっしょにゲームに挑戦！ ～
～ 食材をあつめて最強の手作りピザを手に入れよう！ ～
～ さあ、お母さんとお父さん、兄弟と一緒に冒険をしよう！！ ～

お母さんは、ちらしを受け取ってちらっと眺めた。漢字には1年生向きにルビが打たれてあった。

「ねえねえ、行ってもいい？ しっかり読んでよ！」

「ちょっと待ってよ・・・ふーん。楽しそうな写真もあるわね」

そう言って、じっくり読み始めた。

「ねえ、『おやこでいっしょに』って書いてあるでしょ。一緒に行こうよ。僕、ピザを食べたいよ。」

まことは、「行きたい行きたい」と言いながら、お母さんの周りをぐるぐると回った。お母さんは、まことがいつもの行動よりも真剣におねだりする姿を見て、これは本気だなと思った。それに、小学生になって何か変わったのならうれしいと思った。

「はいはい、わかりました。グルメハンターがそんなに気に入ったの。それに、このボーイスカウトって、けいこちゃんが入っているところかしら」

「お母さん、ボーイスカウトの説明も書いてあるでしょ。ぼくは、ビーバースカウトなのかな」

「どこに書いてあるかな。ここね。ビーバースカウトは小学1年生と2年生、カブスカウトは小学3年生から5年生までの学年で構成されているって。まことは、間違いなくビーバースカウトだよね」

「やっぱりそうでしょ」

まことは、自分がビーバースカウトになったような気持になっていた。

「とにかく、お父さんにも相談しないとイケないし、けいこちゃんのお母さんにちょっと聞いてみようか」

「やったー！ ちゃんと聞いといてね。じゃあ、遊びに行ってきたーす」

まことは、お母さんの言葉を聞くとすぐに外へ飛び出していった。

「ああ！ 気を付けるのよ！ 早く帰ってくるのよ！」

けいこちゃんは、まことと同じ幼稚園で同じ小学校のとても活発な女の子だ。これまで、ビーバースカウトのお兄ちゃんと一緒に集会に参加していた。この4月、小学3年生になったお兄ちゃんはカブスカウトになり、小学1年生になったけいこちゃんは正式なビーバースカウトになるのだ。

しばらくして、お母さんのスマホが鳴った。画面には「原田さん」と表示されている。けいこちゃんのお母さんからだった。画面を耳に当てると、早口で話す声が聞こえた。

「山本さん？ お久しぶり。原田です。急にごめんなさいね。今日、学校でちらしをもらったでしょ？ グルメハンターっていうちらし。ちょっと、宣伝も兼ねてお電話しちゃったんだけど、今時間大丈夫かしら？」

「ええ、ちょうど今、まことから聞いたところよ。やっぱり、けいこちゃんが入っているところなの？ 電話して聞こうかと思っていたところなのよ」

お母さんのこの言葉に、けいこちゃんのお母さんは勢いづいた。

「そうなの！ よかったわー！ 参加してもらえないかな。ほんとにおもしろいことがいっぱいあるから。まこと君だったら、きっと喜ぶよ～、絶対に！」

「そう？ そんなにおもしろいの？ まことったら、『行きたい、行きたい』って言っていたのよ」

「そうでしょ？ 間違いないから！ ゲームしたり、ピザを作ったり、普段出来ないことが沢山できるわよ。気になるなら、まずは来てみてよ！ ちらしの問い合わせ先に連絡してくれたらいいからさ。」

放っておくと、けいこちゃんのお母さんは延々と話を続けそうだった。

「わかったわ。まこともすごく行きたがってるし、連絡してみるわ。じゃあね」

この後もけいこちゃんのお母さんは、いろいろ付け加えて話した。

「・・・ということで、待ってるからね、絶対よ！」

電話が終わる頃、お母さんの気持ちはもう固まっていた。そして、今晚、お父さんに相談しようと、忘れないようにちらしを冷蔵庫に張った。

数日後の夜、まことは、家族一緒に晩御飯を食べていた。まことは、この前からずっと気になっていることをお母さんに聞いた。

「ねえ、お母さん。日曜日のグルメハンター、どうなった？ 行ってもいいの？」

「ああ、そうだったわね、まだ言ってなかったわね。ねえ、お父さん。」

お母さんは、そう言って、お父さんの方をちらりと見た。お父さんは、お母さんに促され、二人で相談した結果をまことに話した。

「まこと、お母さんと一緒に行ってくるといいよ。たくさん食べておいで」

「ほんとに！ やったーっ！！ ピザだ。ピザ！ 楽しみだなあ」

まことは、喜んで体を左右に揺らした。お母さんはその様子を見て、笑いながら付け加えた。

「まこと。あのちらしに、ボーイスカウトの説明が書いてあったでしょ。だから、お母さんもちょっと興味が湧いてきたの」

まことは、「ふーん」と聞き流した。

これにお父さんが応えた。

「お母さん、確か、ボーイスカウトは、『仲間たちと自然の中で遊びながら、より良き社会人を目指す活動』をするんだよね」

「ええ、そうよ。でも、なんか難しいわね。わかったような分からないような感じ」

「ハイキングやキャンプをするんだから野外活動が多いということだろうね」

「グルメハンターもそうよね。でも、『より良き社会人を目指す活動』がよくわからないわ」

「ボーイスカウトと言えば駅で募金活動したり、公園の清掃をしたりして、ボランティア活動もしているよね。子供たちを教育しているという気がしないかい」

「子供を教育する活動なの？ そればかりじゃ楽しくないでしょう」

「う～ん。それはそうだな。じゃあ、グルメハンターに行ってから聞いてみたらどう？」

「そうね。そうするわ」

お母さんは、つまらなそうにしているまことを見て言った。

「ねえ、まこと。あの後、けいこちゃんのお母さんから電話があってね、『ぜひ参加してほしい』って。『ボーイスカウトのいいところがいっぱいわかるよ』って頼まれたのよ。それで決めたのよ」

まことは、お母さんやお父さんが言っていることは、もう気にしていないようだった。それよりも、お父さんが来ないことの方が気になっていた。

「お母さんと一緒になって、お父さんは行かないの？ 家族で一緒の方が楽しいのに！」

「お父さんもほんとは行きたかったんだよ。とっても興味が湧いてね。でも、仕事で行けないから、お母さんと一緒に行っておいで。それで、感想を聞かせてよ」

お父さんは、本当に残念だと言わんばかりに大げさに肩を落として見せた。まことのお父さんは、休日も仕事が入るのは、いつものことだった。まことは、

「感想？ 何かわからないけど、一緒に行けないのか・・・」

と声を小さくしながら、残念そうにした。

それを見て、お父さんは自分の気持ちを伝えた。

「まこと、ボーイスカウトは、なかなかよさそうじゃない。

お父さんはさ、仕事で、山なんかになかなか連れて行ってあげられないからな。小さいときにいろいろなことをいっぱい体験しておいた方がいいし、気に入ったら、まこともボーイスカウトになったらいいんじゃない

ないかって、お母さんと話していたのさ。なんか、かっこいいじゃないか」

「お父さんは？ 全然一緒に行けないの？」

まことは、お父さんとも一緒に参加したいと思っていた。

「もちろん、時間が空けば一緒に行くよ。でも、行けないときは、まことからたくさん話を聞かせて欲しいんだ。」

「わかった。今度行ったこと、いっぱい話してあげるね」

まことは、気持ちを和らげて、今度の日曜日のことを考えると、とても楽しい気持ちになった。

グルメハンターの朝、まことは、目が覚めるといつもより30分早かった。パジャマ姿のまま、朝ごはんの準備をしているお母さんに声をかけた。

「お母さん、今日はいい天気だね。楽しみだなあ。ぼく、ゲーム頑張っちゃうからね」

「それで、早く起きたんだね。しっかりやってピザをゲットしようね」

「うん。お母さんも頑張ってるね」

まことは、そう言うと両足を広げた。そして、両腕を前にして、手の平を握ってこぶしを作った。そして、腰を左右に「きゅっ、きゅっ。きゅっ、きゅっ」と2往復させた。

「まことったら、なによ、そのかっこうは」

「うん。ぼくの頑張るポーズだよ。今日から始めるんだ。ははは」

「うふふ。そう。張り切っているのね」

「今日は頑張るんだ！」

お母さんは、いつもと違うまことのやる気を頼もしく感じるとともに、そのポーズが、おかしくてたまらなかった。

まことは、お母さんと一緒に自転車に乗って緑地公園に出かけた。

服部緑地公園は、吹田市と豊中市にまたがる大阪府を代表する緑地の一つだ。陸上競技場、テニスコートなどのスポーツ施設、乗馬センター、日本民家集落博物館、野外音楽堂、子供用の遊具施設、バーベキュー広場、それに大きな池が4つある。中央に南側へ傾斜している円形花壇があり、その南側にある「谷あいの原っぱ」は、レストハウスから下り坂になる広場で、公園内で一番大きな広場だ。周囲の林の中では、日差しを避けてバーベキューをするグループが絶えない。休日には多くのグループや家族連れで賑う。

緑橋から公園の中に入ると、あちこちでたくさんの人が歩いているのが見えた。広い道で自動車が走っていないから気持ちいい。また、桜の花見の時期は終わり、桜の木はさすがに新緑の葉に包まれていた。まことは、気持ちが少しずつ高まってきた。

前を歩く人をゆっくり追い越しながらまっすぐ進み、円形花壇で右に曲がる。さらに花壇に沿って左に曲がるとレストハウスの横に受付が見えた。

「お母さん、あそこだよ」

まことは、そう言うと思わずスピードを上げた。

「まこと、ちょっと待ってよ」とお母さんも負けずに追いかけた。

受付の机横には、ボーイスカウト豊中第2団と書かれた青いのぼりが風に揺れていた。机には、茶色のハットをかぶり、ベージュと緑のツートンカラーの制服を着た大人が3人座っている。

2人はレストハウスの外周の壁に自転車を置き、受付の前に向かった。

「おはようございます。山本です！」

とお母さんが、挨拶をした。

「おはようございます。よろしく願います！」

受付の男の人が、お母さんに挨拶をしてから名簿を見た。そして、にこにこしながら、まことの方を向いた。

「おはよう。まこと君ですか？」

まことは、急に話しかけられて、どぎまぎしながら小さな声で返事をした。

「おはよう」

「まこと、『おはようございます』でしょ」

お母さんからこう注意されたので、まことは、ちょっと大きな声で言い直した。

「おはようございます！」

そして、人懐っこい顔で男の人を見た。ここで、隣の男の人が名札を見つけだして差し出した。

「はい、まこと君。今日はいっぱい楽しんでくださいね。これ名札です。どうぞ」

男の人は、そう言って2人に大きく名前を書いた名札を渡した。名札カードのカバーには、細い紐が通してある。

「ありがとうございます。じゃあ、まこと、早速首にかけようか。さあ、首を出して！」

「わかった。なんだかすごそうだ」

お母さんから名札を首に掛けてもらったまことは、名札に書かれた『やまもと まこと』の7文字を見て、わくわくした気分になった。

「それでは、集合場所に案内します。一緒に行きましょう」

端にいた女の人が、席を立てて2人の前に出てきた。そして、2人と並んで歩き始めた。

お母さんは、テキパキと動くこの女の人を親切な人だなあと考えた。

集合場所は、受付から150メートルぐらい谷あいの原っぱを下った一番奥だ。原っぱの奥は平らになっていて、ピクニックテーブルが2つ、原っぱと林の境界に置かれてある。谷あいの原っぱ全体は、その周囲を大きな樹木の林で囲まれている。原っぱの先には大きな池がある。

すでに大勢の人が集まっていた。そこには、同じのぼりが数本立っているのも見えた。

「お母さん、あそこだよ。きっとあそこだね！」

まことは、焦る気持ちを隠しきれないように軽くスキップしながら、手を遠い先に伸ばして叫んだ。

「そうね。たくさん人がいるね」

「今日は16家族45人が参加しますよ。全部で80人ぐらいになる予定です」

案内している女の人が、にこにこしながら説明した。

「すごい人数ですね」

「隊長たちがいろいろ工夫しているから、きっと楽しいですよ」

「隊長さんっていうのは？」

お母さんは、普段使わない言葉だと思って聞いてみた。

「ああ、ボーイスカウトは子供たちの年齢によって5つの隊に分かれています。その隊には、隊長と複数の副長がいるんです」

「はい？ あなたは副長さんですか？」

「いえ、私は団委員です。各隊の運営を支援している団委員がいて、その中の一人です。全体の責任者は、団委員長と言います」

「いろんな人がいるんですね」

お母さんは、まだ組織がよく理解できないようすで、曖昧な返事をした。

「2団は、地域の人たちが集まって、みんなで協力してやっているんですよ」

「そうですか。ありがとうございました」

「いえいえ、何でも聞いて下さい」

集合場所は、草地と土の地面が半々になっていた。林の中はというと、たくさんの枝葉が折り重なっている。集合場所には、親子連れがいっぱいいて、小さな子どもが15人ほど動きまわっていた。男の子も女の子もいる。

「お母さん、あの青い制服を着ている子供たちはスカウトっていうのかな」

「まことより、少しお兄さんみたいね、きっとカブスカウトだと思うわ」

3人は、手にバインダーを持っている若い指導者に近づいて行った。

「高井隊長、山本さんとまこと君です。よろしくお願いします」

案内の女の方は、そう言ってから受付の方に戻って行った。

「あっ、おはようございます。高井です。今日はよろしくお願いします」

高井隊長の言葉は、はきはきしている。

まことは、高井隊長のハットには緑色の房がついた記章がつけてあるのに気が付いた。

「高井さん、あの一、ハットに緑色の房がついているの。どういう意味？」

「ああ、これのこと？」

ハットを頭から手に取って、答えた。

「これは、隊長の印です。私はベンチャー隊という隊の隊長をしているんだよ」

「隊長？ うわっ、かっこいいね」

「そんなことはないよ。あはっ、ちょっとまってよ」

やっと、バインダーの資料で2人の名前を見つけた高井隊長が、ニコニコしながら言った。

「まこと君には、まいったなー。えーっと、山本さんはB班ですね。今日は、4つのグループに分かれてもらい、グループで別々に行動してもらいます。まもなく始まりますので、この辺りでお待ち下さい」

「はい、よろしくお願いします」

それからまことを見て、腰を下げてから声をかけた。

「まこと君、今日は楽しんでね！ ハットの房は他の色もあるからよく観察してね」

高井隊長は、顔をほころばせながら、まことに観察すると面白いことがあることも伝えた。

「はい！」と元気に返事した。

まことは、心の中で、ボーイスカウトの人はみんながこんなふうに腰を屈めて挨拶をするのだろうか。なんだか、優しいなと思った。それにハットの記章の房は、ほかにどんな色があるのだろうかと関心をもった。

指導者たちは、スカウトたちには立ったままで話しかけずに、スカウトと同じ目線で話をする心を心がけている。自然と腰を下ろしたしぐさになるのだ。

高井隊長が、みんなとは少し離れたセレモニーをする場所の中央に出てきた。いよいよ始まりだ。

「集合して下さい！」と声をかけた。

「集合ですよー！ 移動して下さい！」と、制服を着た他のリーダーたちも、同じように声を出している。

「こちらからA班、B班、C班、D班の順に並んで下さい」

高井隊長が、腕を縦に振りながら、説明している。

まことは、お母さんと一緒に他の人とぶつからないように、B班の列に移動してちょっと前の方で立ち止まった。

ぞろぞろと80人ぐらいの人たちが、高井隊長の前に動き出して4つのグループができた。各班の先頭にボーイ隊のスカウトが手を上げながら立っていた。ボーイ隊のスカウトは、指導者と似たツートンカラーの制服を着ていた。

2人の後ろから、けいこちゃんのお母さんが近づいてきた。

「山本さん！」

お母さんは、振り向いてから返事をした。

「あら、原田さん。おはよう」

「おはよう。残念だけどD班になっちゃった。まこと君、頑張っってね！ またあとで」

「うん。またあとで。じゃあ」

お母さんたちは、ハイタッチして別れた。

「最初に、国旗儀礼を行います」と高井隊長が全員に向かって言った。

ボーイスカウトの人だけが、国旗に向かって敬礼をした。そして、ボーイスカウトの連盟歌を歌いだした。体験者たちは、成り行きを見ているだけだ。連盟歌は、途中で「フレ！フレ！フレ！」というひとときわ大き

な声を出すところがある。

まことは、このところが印象に残った。みんなの声がよく揃っていてびっくりした。

連盟歌が終わると、高井隊長が団委員長を紹介した。

「それでは、次に団委員長の浜嶋から挨拶があります」

高井隊長の横に立っていた日焼け顔で眼鏡をかけた年配の指導者が、にこにこしながら中央にでてきた。ハットには、白い房の記章が付けられている。

「お母さん、あの人はボーイスカウトで、一番偉い人みたいだね。だって白色だよ」

「ほんとだ。あの浜嶋さんに今日の連絡をしたのよ」

「やっぱりそうか」

ちらしの間合せ先に浜嶋団委員長の名前とメールアドレスが記されていた。お母さんは、メールで連絡をしたのだ。

「おはようございます！」

浜嶋団委員長は、ひときわ大きな声で挨拶した。

それにつられて全員が、「おはようございます！」と大きな返事をした。

まことは、みんなの声が大きかったのに驚いて、周りの人たちの顔を見渡した。

「大きな声で返事をしてもらいました。皆さん、とても輝いていますね。とてもうれしいです。最初から気持がいいですね。今日一日楽しく遊びましょう！」

浜嶋団委員長の話は簡単に終わった。

まことは、浜嶋団委員長の声がすごいなあという印象だけが残った。

セレモニーは、挨拶も含めて短かった。これがボーイスカウトのスマートなやり方とされている。こうして行なわれたことは、体験者によい印象を与えた。

「これで開会セレモニーを終わります。早速、プログラムの説明を始めます」

高井隊長は、そう言ってさっと横に下がった。

入れ替わりに、林の陰からコックの衣装を着た若いリーダーが、威勢よく飛び出してきた。

「はいー！ 私は、ウマーイ・ピザーロと言いま〜す！」

頭の上に白くて長い帽子をかぶり、おもちゃのメガネをかけている。ウマーイ・ピザーロは、ピエロみたいにくねくねと手足や体を動かしながら、体験者を楽しませようと陽気に話しているのがわかる。メガネの中には大きな目が描かれている。このおかしい顔を見るうちに、参加者たちの緊張していた顔がにこやかな顔に変わっていった。

「お母さん、あの人が楽しいね」

「そうだね。おもしろいね」

ウマーイ・ピザーロは、何かお願いがあるようだ。

「私が作ったピザのレシピが嵐で森の中へ吹き飛ばされてしまった。これは、えらいことになってしまった。

探しに行ったのだが、変な奴らに拾われて返してくれないのだ。奴らの居場所は分かっている。地図に書いておいた。でも、簡単には返してくれない。いろいろ難しいことをしろと言われる。私は全然できなくて一枚も取り戻すことができなかつたんだ。ああ、困った。困ったよー、ああー」

大げさに両手を頬に当てて、頭を下に下げた。その拍子に帽子が落ちてしまった。

長い帽子は地面で2回転がって止まった。

みんなが大きな声で笑った。

「あっちゃー！ すみませーん」

帽子をかぶり直してから、説明を続けた。

「ああ、困ったことがまた起きてしまった。ア、ハッハッハハ」

これを聞いて、みんながまたどっと笑った。

「すみません。えーと、続きです。今日の昼にピザを作るのに必要なんだ。4つもあるのに時間がない。そこで、皆さんにお願いしたい。私の代わりにレシピをすべて取り戻してほしい。お礼にピザの食材を差し上げます。お願いしま〜す！」

ウマーイ・ピザードを見ながら、お母さんがまことにささやいた。

「まこと、わかる？ これがゲームだよ。公園の中を回りながら、1時間の間に4つのレシピを探すらしいよ」

「そうなの？ 4つもあるってたいへんだな。でも、ちゃんと集めたら、ピザの材料が増えるんだね。緊張するよ」

最後に、ひときわ大きな声でウマーイ・ピザードは叫んだ。

「それでは、皆さ〜ん！ レシピを集めて下さい。お願いしま〜す！」

これで、班長に連れられて各グループが移動を始めた。

さあ、「グルメハンター」ゲームの始まりだ。

まことたちのB班は、丸く並び直した。

「最初だから、簡単に自己紹介をしましょう」

真ん中にいた制服を着たお母さんリーダーが、班長とみんなの顔を見ながら言った。

「じゃあ、僕からやります。今日は班長をするボーイ隊の多田です。よろしくお願ひします」

多田班長は、名札をみんなに見せた。そして、右側を向いたので、隣にいたスカウトの山田君が続けた。

「僕は、ビーバー隊の山田けいた。2年生です」

順番に自己紹介が進んだ。

まことの番がきた。元気な声で言った。

「僕は、山本まことです。1年生です。あ、けいちゃんと友達です」

「そうなんだ。よろしくね」

また、お母さんリーダーが声を出した。

まことは、後で分かったけど、このお母さんリーダーが、清家（せいけ）というカブ隊のリーダーだということを知っていた。

全員の自己紹介によると、カブ隊の親子が2組。その清家デンリーダーの子供はカブ隊の4年生。ビーバ一隊では、けいたくんとお母さん。ボーイ隊の多田班長。体験で参加したのは、まこと君たち親子と、おじいさんとおばあさんも一緒に参加している兄弟とそのお母さん。全部で14人にもなった。

B班のメンバーは、高井隊長の前に整列した。高井隊長が指示書を班長に手渡した。それから、高井隊長は、班長に気合を入れて出発するように指示した。

多田班長は、メンバーの真ん中に歩いてから言った。

「丸くなって下さい！」

一列に並んでいたが、端から班長の左右に移動して、丸くなった。

「みんなで、エイ、エイ、オーと大きな声で言って出発しましょう」

多田班長は、おとなしそうに見えるが、声はとても大きかった。

「じゃあ、お願いします。みんなでレシピを取り返すぞ！」

「エイ、エイ、オー！ オー！」

「あれー！、駄目だー！、ハッハッハッ！」

声は出たが、ばらばらだったので、みんなが笑った。

「じゃあ、もう一度。みんなでレシピを取り返すぞ！」

「エイ、エイ、オー！！」

まことは、思い切り大きな声で言った。今度は、バッチリ揃ったので、みんな笑顔になって満足した。

「できたー。できたね。みんなで頑張ろうね！」

こう言ったのは清家リーダーだ。みんなを見ながらこう言って班長を応援している。

清家リーダーの大きな目とまことの目が合った。じっと見詰めながら清家リーダーが言った。

「まこと君、頑張ってるね！」

「はい！」

まことは、これで清家リーダーがしっかり記憶に残った。

お母さんも、このムードメーカーとなるリーダーを頼もしく思い、清家リーダーを見つめた。

出発するB班の後ろから高井隊長が声をかけた。

「いってらっしゃい。ピザのレシピをしっかりと集めて下さい」

「こちらに行きます」

多田班長が腕を上げて行き先を指示した。まことは、その様子を見て、中学生なのに頼もしいなあと思った。ボーイスカウトになるとかっこいいとお父さんが話していたことを思い出していた。

多田班長は、ゆっくり歩きながらゲームの説明をしている。

「このゲームは、ポイントハイクって言います。歩いて回りながら、ポイントでいろいろなゲームをします。

今から、あのレストハウスまで戻って、それから円形花壇の奥の林に向かいます」

円形花壇は、原っぱからまっすぐ北の方向に見える。

「うわあ、ちょっと遠いなあ」

「えー、あの一番上かなあ」

歩く先を見ながら口々に言った。

地図を持った班長を先頭に、全員で元気よく進んで行った。

まことは、どんなゲームをするのかわからないけど、仲間がいるから大丈夫だと思った。

レストハウスを過ぎて、円形花壇の坂道を歩いて行くといろいろな花々が植えられていて、まさに春本番を迎えていることを実感できた。円形花壇の外周道路の外側は、林で囲まれている。太陽の日差しが暑く感じられた。

展望台に近づいた。見上げると数人の人が座ったり動いていた。展望台の反対側は大きな樹木のこんもりした森がある。道から中に入る入口の階段が見えた。森の中は大木のためか、地面には落ち葉が積もらなく広場のようになっていて、ひんやりとした空間になっている。秋はくぬぎのどんぐり拾いができる。

そこに、制服を着たリーダーが2人立っていた。前に立っているリーダーは、にこにこしながら広場の中に入ってくるB班を見てから両腕を横にした。指先までまっすぐ伸ばしている。

「はい、横一列にきちんと並んで下さい」

スカウトは、いつものことといった様子で、自然に並び始めた。体験者やお母さんたちは、前に続いて隣の人を見たりして、なんとか一列になった。

さらに、リーダーが指示した。

「この人が私の前に来るように班長は左に寄ってください」

全員が少しずつ左右を見ながら移動した。

リーダーが真ん中に位置するように並ぶことになっているのだ。

「それでいいです。班長、報告して下さい」

ポイント地点では、最初と終わりに挨拶をすることになっている。

右端に立っている多田班長が一步前を出て、敬礼した。

「報告！ B班全員到着しました」

班長は、ピシッとした動きで報告して見せた。

「御苦労さま。きれいに並んでくれました。かっこいいですよ。気持がいいですね。それでは、このポイントの説明をします」

リーダーから「かっこいい」と言われたまことは、なんだか誇らしい気分になった。また、一列にきれいに並ぶと気持がいいと思った。それに、リーダーが横に腕を広げてまったく動かないのも、かっこよく見えた。

「リーダーもかっこいいよ」

まことは、思わずリーダーを見上げながら言った。それを聞いてみんながどっと笑った。

「ありがとう！ みんなでかっこよくしましょう」

まことは、ちょっと照れ臭かった。

ここは、「おっちょこちょいの運転手」というポイントだ。かっこいいと言われたリーダーがゲームの説明を始めた。

「では、聞いてくださいね。私は、バイクでレストランにお皿を配達するために、とても急いでいました。それで、近道をするためにここを通ろうとしました。運転していたら、なんとなんと、りすが急に飛び出してきたのです。びっくりして急ブレーキをかけました。すると、運んでいたお皿が荷台の箱から飛び出してしまったのです。それで、みんなにお願いします。できるだけお皿をたくさん箱に戻してください。」

「これをしたら、ピザのレシピをいただけるんですか」

班長が、大事なことを聞いた。

「あ、君たちは、あのウマーイ・ピザ一から頼まれたのか。そうか。彼は、この簡単な手伝いができなかつたんだ」

「だから、僕たちが取り返しにきたんです」

班長は、はっきりと伝えた。

「そうか。この手伝いは難しいぞ。君たちにできるかな？」

「できます！」

「できます！」

「できます！」

とみんなが賑やかに言った。

「ほんとうか？ よしっ、君たちがきちんとできたら、レシピを渡します」

「やったー！」

まだ、レシピを取り返していないのに声があがった。

「じゃあ、しっかりお皿を戻して下さい」

まことは、周りを見渡したが、どこにもお皿は落ちていなかった。それに、バイクは道を通れないのに変だな。みんなも同じことを思いながら、きょろきょろしているようだった。

「それでは、こちらのブルーシートの上でお皿を作ってもらいます。ここに紙皿とホッチキスが置いてあります。あちらには段ボールの箱があります。はい、ブルーシートの上に上がってください。」

段ボールの箱はいくつか積み上げてあり、もう一人のリーダーが持っていた。

スカウトたちは真っ先に靴を脱いで、ブルーシートに上がった。地面に薄いブルーシートを敷いてあるだけなので、足の裏がひんやりする。外でこんなことをする経験がないまことには新鮮だった。

「冷たいー！」という声のでた。

スカウトたちがブルーシートの上に乗ってからリーダーが説明した。

「紙皿を2枚重ねてホッチキスで止めて下さい」

リーダーがみんなに見えるように見本を見せた。まことは、「これだと皿ではなく、円盤みたい」と隣にいたお母さんに言った。リーダーが説明を続ける。

「お皿の用意ができれば、あちらで箱に投げ入れてください！ 入った場所によって点数が書いてあります。みんなでたくさん点数を取って下さい！」

そこまで聞いて、まことは、面白くするために、お皿を投げやすい形にしたんだとわかった。

スカウトたちは、お母さんと一緒になって準備を始めだした。まことも円盤作りに取り掛かった。円盤は思ったより簡単にできた。

最初に挑戦したのは体験の子だった。

「入ったー！ 10点です」

段ボールを持っていたリーダーが大きな声で叫んだ。

「やったー！」

その子はうれしそうに飛びあがった。その子のおじいちゃんやおばあちゃんもにこにこ顔になっていた。

「僕も入るといいなあ」

心配そうにまことがつぶやいた。

その後に挑戦した子どもや大人が飛ばした円盤は、なかなか入らなかった。

まことの番になった。箱までは、3メートルぐらいある。

「えーいっ！」

力いっぱい投げた。円盤は、勢いよく飛んで箱の後ろまで飛んで行った。

「ああ、おいしいなー！」

「残念でしたー！」

リーダーやお母さんたちから慰めの声が出た。

「なんか、かっこ悪くて面白くない」

「まこと、次は頑張ってね」

お母さんの励ましも、まことの耳から消えていった。

そうこうしている間に、次のグループが広場に到着してきた。

多田班長が、大きな声で声をかけた。

「もう一度整列して下さい！」

早くして下さい！ 次に行きます。並んでください！」

まことは、あまりお皿が入らなかったのでレシピを貰えるかどうか心配だった。

全員が並んだところで、リーダーが話し始めた。

「ご苦労様でした。みんな頑張ってくれましたか。お皿はきちんと返してくれたかな？」

みんな黙っている。

リーダーが手に封筒を持っていることに気付いたスカウトが聞いた。

「その封筒は？ ピザのレシピをもらえますかー？」

「そうだったね。うーん。約束通り、ピザのレシピが入った封筒を渡すことにします」

「やったー！」

「ウマーイ・ピザ一口に渡して下さい。もう一つ大事な情報も入っています。ゴールしてから中を見て下さい」

「どんな情報なの？」

聞いた君が聞いた。

「それは後でのお楽しみです」

みんな中身が気になるようで少しざわついたが、多田班長は、封筒を受け取るとリーダーに敬礼してから言った。

「B班、出発します！」

「頑張ってください！」

リーダーに挨拶し、まことたちは、次のポイントに移動を始めた。

少し歩いてから、多田班長がこっそり言った。

「ここだけの話だけど、大事な情報というのは、ピザの材料のことらしいよ」

「なあんだそうか。班長は何でも知ってるんだなあ」

まことは、安心して、つぎは頑張らなきゃと思った。

B班は、班長の後から広場の奥にある階段道を下りて行った。そこは、さっきの広場の裏側で谷になっている。足元は落ち葉がいっぱいだ。暗くてひんやりしたところだが、野鳥観察の人たちがよくここに来る。そんなときに煩くすると叱られる。幸い今日は、その人たちはいなかった。道の横に置かれたベンチでは、2人のリーダーが待っていた。

B班が、リーダーの前に整列し終わった。

「B班は、このポイントが2つ目ですね。ピザのレシピはゲットできましたか」

「はい。ゲットしました」と班長が答えた。

「それはよかったですね。ここは『いたずら好きの魔法使い』というポイントです。それでは説明します。そこに座っている魔法使いが、いろいろなものを出してきます」と魔法使いの方を手で示した。

魔法使いは、「ひっひっひ」と笑っている。なんだか気味が悪い。

「ただし、それは布袋の中に入っているので見えません。皆さんは、袋に手を入れて手探りで触ってみて、何が入っているかを当てて下さい。ウマーイ・ピザ一口は、これができませんでした。難しいよ。君たちは大勢いるけど、大丈夫かなあ」

みんなはちょっと不安になった。

「レシピをゲットするには、半分以上の人が正解してください」

これを聞いて、顔を見合せながら緊張してしまった。

「じゃあ、さっそく始めます。一列に並んで順番に魔法使いのところに行って下さい」

先頭の多田班長から始まった。

魔法使いのリーダーは黒い頭巾を被り、黒いマントを着ている。

「よろしくお願いします」

「いい挨拶じゃ。ひっひっひっひ。最初が一番難しいぞ。袋の中にあるものがなにか分かるかな。ひっひっひ」

「リーダー、その笑い方は気持ち悪いですね」

「ひっひっひ。失礼な奴じゃ。わしはリーダーではない。魔法使いのお婆さんじゃ。ひっひっひ」

「お婆さん？ お爺さんじゃないのかな。はいはい、魔法使いのお婆さん。これは、ボールペンです」

「お、班長、よくわかったな。ひっひっひ。正解じゃよ。おめでとう。よし、次のものに代わってくれ」

班長は、簡単に当ててしまった。そして、次のメンバーたちを励ました。

「みんな、心配ないからね。簡単、簡単。魔法使いはお爺さんじゃなくてお婆さんと言ってあげてね」

「ひっひっひ、そういうことじゃ。婆さんじゃよ。ひっひっひ」

と魔法使いはうなずいた。

順番に一人ずつ袋に手を入れていく。

「頑張っ！」と仲間からの声援が飛ぶ。

「どうしてなんじゃ。お前達は、どうしてこんなに難しいものが簡単にわかるんじゃ」

魔法使いの言葉と関係なく簡単な物ばかりがでてきた。

結果は、ボールペン、ロープ、電卓、ハンカチ、本など、次々と簡単に当てることができた。

いよいよ、まことの番だ。

「魔法使いのお婆さん、よろしくお願いします」

「よしよし、よく言えたぞ。いい子だ。お前は特にいい子だ。ひっひっひ」

まことは、魔法使いは気味が悪いなあと思いながら袋の中に手を入れた。

まことは、思ったことを口に出した。

「これは布と棒です。引っついていきます。旗みたいだ。棒がついているから、小さな応援の旗です」

取り出すと、見たことがない旗だった。

「ひっひっひ。そうじゃな。これはボーイスカウトがいつも持っている手旗と言うものじゃ。お前は、今まで見たことがないじゃろ。ひっひっひ。ひゃっくしょん。まあいい。応援の旗で正解にしてやろう！ ひっひっひ。ひゃっくしょん」

魔法使いは、にっこり笑って言った。

「やったー！」とまことは、うれしそうに声をあげた。

お母さんが、「よかったね」とささやいた。続くお母さんも正解し、全員が中身を当てることが出来て、

このゲームはすんなり終わった。

まことは、お母さんに言った。

「あの魔法使いは、恐そうだったけど、優しかったね」

「そうね。お風邪をひかなければいいけど」

「あれは、うそでしょ？」

「あら、まことはわかっていたの」

と言いながら、お母さんは笑った。

整列の後、リーダーから班長にピザのレシピが渡された。

「つぎは、少し遠いです。円形花壇を下っていきます」

多田班長がそう言って歩き出した。

まことは、今度もやる気いっぱい元気な歩いで行った。

先頭を歩く多田班長は、円形花壇を下ってから右側の細い道に進んで行った。ここは日本庭園のエリアで低い樹木ばかりで見通しが悪い。小さな池が2つあり、その周りに回遊できる細い道がある。

「あそこだ！」

先頭近くにいた男の子が大きな声で言った。

前方にリーダーが立っているのが見えてきた。

到着すると、また整列をする。何度も繰り返しているのだから、整列はスムーズにできるようになった。

「えっへん。私は、森の中を探検している探検家だ。君たちは知らないかもしれないが、私は世界でも有名な探検家じゃ。えっへん」

探検家は、長い口髭をなでながらゲームの説明を始めた。

「いいか。ここから向こうの茂みに動物がたくさん潜んでおる。。私は大変臆病で、動物がすごく怖いのだ。そこでじゃ、私の代わりに動物を見てきてくれたら、ピザのレシピを渡してあげよう。えっへん。ただし、これだけはくれぐれも約束してくれ。いいかな、動物は決してこちらに連れてきてはいかんぞ。わかったな。えっへん」

まことは、「臆病なのに探検家をしてるなんて、なんか変だなあ」と思った。

別のリーダーが説明を追加した。

「あ、気をつけてほしいことがあります。動物が逃げたりしないように、ぜったいに話をせずに静かに歩いて下さい。そのあとで、見つけた動物の名前を紙に書いて私に渡して下さいね」

まことは、向こう側を見ても、動物がいるようには見えないと思った。

「なんかよくわからないなあ」

「とにかく、行きましょう。よく周りを見て下さいね」

班長がこう言って、リーダーの後を先頭になって、細い道を一列に並んで歩き始めた。

それから少し歩いて、班長が言った。

「リーダー、動物なんて全然見えないよ」

「草の中をよく見て下さい。たくさん隠れています。木の枝も見て下さい」

リーダーがヒントをくれた。

「あそこにいる！」

前の方で誰かが言った。

「シー！ ダメよ。声を出しては」

清家リーダーが注意した。

まことも見つけることが出来た。動物の絵が草の中に置いてあるのが見えた。

「動物って絵だったのか。小さくて何かよくわからないよ」とまことはつぶやいた。

そのうちに、誰かが見つけたら、黙ってそこを指して、顔を見合わせながら、口だけ動かして動物の名前を言いあうようになった。声を出さないことで、かえって連帯感が生まれたようだ。見つけた動物名は、記憶しないといけない。たくさんあったので、まことは、全部覚えていられるか不安になった。

終点に着くと、リーダーが班長にバインダーに挟んだ紙を渡した。

「じゃあ、班長はこの紙に動物の名前を書いて下さい」

班長の周りにみんな集まった。

「一人ずつ言って下さい」

多田班長は、自信たっぷりの表情で、もらったバインダーに書き込む格好をしてみんなに聞いた。

「象」

「キリン」

「かば」

「ライオン」

・・・

B班が見つけた動物は、9個だった。

「もう、ありませんか。まだあったように思います」

班長はそう言ったが、誰もそれ以上思い出せなかった。

まことは、まだ何かあったような気がしてならない。勇気を出してみんなに言った。

「あの一、9個は中途半端だからもう一つぐらいあるんじゃないですか」

班長も言った。

「まこと君、そうだよね。皆さん、もう一つ思い出して下さい」

そこで、けいた君が、大きな声をだした。

「あー、あれ、あれ、あれ。枝のところにあったやつが・・・そうだ！」

「コアラだ！！」

みんながうれしそう声を出した。

「あー、よかった。見つかった」

まことは、自分が言って一つ追加ができてうれしかった。

「まこと君のお陰だね」と清家リーダーが誉めてくれた。

班長は、リーダーに報告した。

リーダーは、動物の名前をチェックした後、発表した。

「よくできました。でも残念。あらいぐまが抜けていましたね。でも、11個中10個はとてもよくできましたよ」

「ええー、11個なの。ずるいなー」

とまことは、残念そうに声を出した。

「はははは、ごめんね」

リーダーはそう言って、レシピの封筒を班長に渡した。

「楽しかったかな？ このゲームは、ボーイスカウトが得意にしている観察力を発揮してもらおうゲームだよ。体験してくれた人たちも立派なボーイスカウトになれるね。それでは、最後のゲームを頑張ってください」

ここで、まことがリーダーに聞いた。

「ねえ、どうしてウマーイ・ピザーラは、これができなかったのですか？」

「はっはっは、ウマーイ・ピザーラには内緒にしてあげてね。それはねえ。ウマーイ・ピザーラは、ライオンを臆病な探検家のところに持って行ってしまったんだよ。探検家はびっくりしてレシピを持って、どこかに隠れてしまったんだよ」

みんなは、これを聞いて大笑いした。

「次で最後です。場所も近いです。頑張ってください」

この班長の声は、ちょっと力が弱くなったようだ。

「みんな、最後だよ。頑張りましょうね。ファイト！ ファイト！」

すかさず、清家リーダーから班長をフォローする力強い声が聞こえた。

これで、全員が元気を出して歩き出した。

最後のポイントは、円形花壇の反対側の林の中にある。広い道に戻って、レストハウスの横を通り過ぎて進んで行った。

班長は、大きなユーカリの木があるところで一度立ち止まって、そこで後ろを確認した。このユーカリの木は高さが20m以上もある。

「まこと、あの大きな木は何だかわかる」

「うん、ユーカリだよ。さっきも通ったけど、どうしてここにあるのかなと思ったんだ。去年、オーストラリアに行ったときたくさんあったよね」

「覚えていたのね。まことの観察力もたいしたものね」

「えっへん」と満足気に微笑んだ。

班長は、全員が班長に近づいてから声をかけた。

「大丈夫ですか。ここから中に入りますよー」

班長は、先頭になって慎重に歩きながら、林の中に入って行った。

枯れ葉を踏みながらフワフワした地面をゆっくり、少し広いところまで進むと、そこにロープが張ってあることが見えた。何をするかは誰でもわかる。

「やりたい！ やりたい！」

誰かがロープの方に走って行った。

そこにワシの面を被ったリーダーが待っていた。

「こちらに整列して下さい」

「B班、到着しました！」

班長は、ワシのリーダーに報告した。

また、ゲームの説明が始まった。

「私は、ワシだ」

くすくすという笑い声が聞こえた。

「黙って聞いてくれ。私は年を取ってしまっただけで、今はもう飛べなくなってしまったのだ。これは秘密のことだが、君たちには教えてあげよう。実は、谷の向こうにおいしい果物があるのだ。だがな、私はそれを取りに行けない。私の代わりに綱を渡って取ってきてほしい。果物を取ってきたらレシピを渡そう」

大きな木と木の間に平らな黄色のロープが張ってある。この上に乗って歩くためのロープだ。もう一つは上に張ってあり、これは手で掴みながら進む丸い太いロープだ。長さは、4メートルぐらいある。

まことは、「これなら、ワシは飛べなくても自分でロープを渡って取りに行けばいいのに」と思った。

若い方のリーダーが言った。

「一人ずつ、全員が渡って下さい。誰からやりますか。はい、順番にやりましょう」

「班長から先にやってよ」

「よし、みんな見ててね」

多田班長は、張り切ってロープを渡り始めた。

「ワー、落ちそう」

「ガンバレ、ガンバレ！」

体が傾くとぐらっと倒れそうになる。ロープの上に乗っすぐ乗ることがコツだ。

つぎは、けいた君の番になった。

「よっしゃー、俺がやるぞ！」

けいた君は、全然怖がる感じもなく、すいすいと渡って行った。

5人ぐらいが渡り終わった。まことは早くやりたくて、うずうずしていた。

「次やります」

「はい、まこと君がやります。頑張ってください！」

まことは、しっかり上のロープを持って右足で下のロープを踏んだ。左足を上げて体重をかけるとロープが沈んだ。上下にロープが揺れた。でも、左足を前に出して、また右足を出して、うまく進んで行った。

急にぶらぶら揺れた。

「頑張れー！」

と言いながら、若いリーダーがロープを揺すっていた。

「止めてー！」

「まこと君、うまいぞ！」

真ん中まで来て、ちょっと危ないところがあったけど、うまくゴールした。

「やったー！」

「うまいぞ！！」

まことは、楽しくてもう一回やりたかったが、時間がなかった。

大人は、バランスが難しくよく揺れた。

「ああ、だめー！」

太っている人は傾いたらもう戻らなかった。

「はい、よくできました。これで終わりですね」

「ああ、おもしろかった。あれ？、おいしい果物があるって言ってたような・・・」

まことは、ワシが最初に言ったことを思い出しながら考えていた。

「全員無事に渡りました。はい、最後も整列して下さい」

ワシのリーダーが最後のピザのレシピを班長に渡した。

出発してから1時間ちょっと、これで4つのゲームが終わった。

「お母さん、最後にワイルドなゲームでお腹すいたよ。こんなことばかりやってほしいなあ」

「ほんと、まことはこういうのが好きだよ」

まことがお母さんに話していると、清家リーダーが横から口を挟んできた。

「まこと君は、体を使うのが好きなのね。ボーイスカウトでは、ロープ渡りの他にも、モンキーブリッジとか滑車滑りとか、大型工作物を使ったゲームもあるのよ」

「すごいですね。リーダーたちが考えるんですか？」

と、お母さんが聞くと、清家リーダーは誇らしげに胸を張って答えた。

「それもあるけど、ボーイスカウトは歴史が長いですからね、2団では伝統的にリーダーに継承されているのよ。観察力や記憶力を鍛えられるゲームが沢山あるし、工作技術も身につくわよ。スカウトたちにいろいろな体験をさせてあげることが大切なことと考えているの」

清家リーダーは、ボーイスカウトをさりげなくPRした。

「ほんとにいろいろなことをしていただいたわ」

「お母さん、ぼく、もっと揺らしても大丈夫だよ。またやりたいな」

「そうだね。お母さんはだめだけど、まことなら大丈夫ね」

まことたちが、谷あいの原っぱに戻ってくると、高井隊長が待っていた。

「みんなもう少し頑張っってね。最後の報告をしてください」

報告をするとけじめができて気持ちがいい。参加者たちは、このやり方にすっかり慣れてしまった。

「みんな整列してください」

多田班長の言葉がみんなに聞こえたようだが、疲れているせいで整列するには時間がかかった。

「お疲れ様。B班の到着ですね。時間通りに戻りましたね。ピザのレシピはゲットできましたか」

「レシピの封筒を貰ったけど、中身はわからない。見ちゃいけないって」

けいた君が文句を言った。

「他にも情報が入っているって、どういうことですか」

まことも聞いてみた。

「ああ、情報ね。それは、みんなが作るピザの食材カードのことだよ」

「やっぱり、食材だー」

「はい、楽しみですね。それでは、あちらにいるピザ担当リーダーのところに行って、指示に従っておいしいピザを作ってください。」

やっとピザを食べる段階に進んだ。みんな、お腹が空いていたが、もう少し時間が必要だ。今度は、元気を出してピザ担当リーダーのところへ歩いた。

ピザ担当リーダーが説明を始める。

「それでは、班長、4つのレシピの封筒を出して下さい。そこには、レシピとピザの食材カードも入っています。カードに書かれてある食材をお渡しします。読みあげて下さい」

「ええーっと。サラミソーセージ、トマト、むき海老、それから、しめじです」

班長が読み上げると、全員が「おおー!」、「やったー!」と嬉しそうな声を出した。

そこへあのウマーイ・ピザーロが現れた。

「はいー! ありがとうございますー!」

おもしろい顔は、変わっていなかった。目の前で見るとやっぱりおもしろい。

ウマーイ・ピザーロは、全員とおおげさに握手して回り、「ありがとう」を連発した。

「皆さん、ピザのレシピを取り戻してくれてありがとう。ピザを楽しんで食べて下さい。じゃあねー」

あっという間に消えていってしまった。

まことは、この一瞬の出来事にも楽しさを感じた。

「はい、ウマーイ・ピザーロが喜んでますね。もう行ってしまいました。さあ、ピザの豪華な食材ですよ。いいですか。みんなには、この材料を切ったものを渡します。このトッピングでピザを作ってください。チー

ズは別に渡します」

ピザの生地の上に、各自が食材を好きなように並べて作るマイピザだ。

班長が材料とチーズを受け取り、清家リーダーがピザの生地やお皿を受け取って、B班のテーブルに移動した。

「それでは、材料を置きますから、おいしいピザを作ってください。」

「生地を一人ずつ渡すね。お母さんも作ってくださいよ。おじいちゃんもおばあちゃんも作って下さい」

目の前にちょっと小さなピザの生地が配られた。

「なんか楽しいな。全部の材料を乗せたらおいしくなるよね」

とまことは言いながら、実際はうまく乗せるのはなかなか難しい。

「材料は薄く広げて下さいよ。その上にチーズを乗せるのよ」

清家リーダーは、出来上がりを心配しながら言った。

ピザを焼くのは担当リーダーが手伝っている。各自のピザを窯に入れるのだ。

「ちょっと炭の火が弱くなっているので少し待ってくださいね。その間にスパゲッティを食べてください」

ピザを窯に入れてもらった人は、スパゲッティをもらいに少し離れた場所に移動した。

スパゲッティのコーナーで、数人が並んで待っている。ここのリーダーも緑の房をつけた隊長だ。

まことは、並ぼうと列の一番後ろに向かったが、横から流れてくる匂いに気付いて、そちらの方にふらふらと引き寄せられていった。

「まこと、どこへ行くの？」

お母さんが追いかけていく。

匂いの先では、木で組んだかまどの上で火を燃やしていた。その上に棒に巻きつけたパンがあり、パンの表面はこんがり焼けている。

何でも知っているようなベテランのリーダーが、にこにこしながらパンを焼いていた。

「これ、なあに？」

まことが聞いた。

「これはね、ツイストと言います。これも食べさせてあげるからね。もう少し焼いてからね」

「いつ食べるの？」

「そうだなあ、ピザを食べ終わったころかな」

「こんなん、おいしいの？」

「こら！　こんなんってことはないだろう。おいしいぞ。ちょっとあげようか。内緒だぞ」

にこにこしたリーダーが、端っこの焼けているところをちぎって手渡してくれた。まことは、そっと口に入れた。

「甘くておいしい。お母さんにもあげてくれる」

「はいはい、お待ちください」

お母さんも小さなかけらを受け取った。

「おいしいですね」

そのとき、スパゲッティの担当リーダーが後ろから呼びかけた。

「スパゲッティが欲しい人は来て下さいよ！」

まことは、この声でスパゲッティを思い出し、走って戻った。

B班の人たちは、スパゲッティをもらった後だった。お皿にいっぱいスパゲッティを乗せてもらって、ブルーシートが敷いてある自分の席に戻った。ここは、大きな樹木の下で日陰になっていて涼しい。

スパゲッティを食べ終わる頃、ピザも焼き上がった。担当リーダーのところに行って、自分のピザを受け取る。チーズがとろりと溶けてとてもおいしそうに見えた。

ピザを食べているまことのところに、浜嶋団委員長がやってきて、お母さんに話しかけた。

「団委員長の浜嶋です。よろしくお願いします」

「今日はありがとうございます。楽しませてもらっています」

「まこと君、楽しかった？」

「うん」

まことは、ピザで口をいっぱいにさせながら返事をした。

「自分で作ったピザはおいしいですか？」

「ちょっと時間がかかったよ。とても待てなかった」

お母さんが、そこへ口を出した。

「でもねえ、スパゲッティで先にお腹が膨れたよね」

「それはよかったね。お腹をいっぱいにしてね」

まことは、浜嶋団委員長に話しかけられて、気安そうな感じがしたので、気になっていたことを思い切って聞いた。

「あの一、あそこで、何て言ったかな。あのパンを早く食べさせて下さい」

「ツイストのこと？」

「そう！ なかなかおいしい」

まことは、思わずおいしいと言ってしまい、「しまった」という顔をした。

「どうして？ どうして知っているのかな？」

「ちょっと・・・」

もごもご口ごもっているまことに、浜嶋団委員長は、にっこり笑った。

「知っているよ。あのリーダーにもらったでしょ。団委員長は見ていたから。ツイストはもうすぐ焼けるよ。それと、団委員長がうれしかったのは、まこと君がツイストに気がついたことだね。気がついたことは、とてもいいことだよ。ボーイスカウトになったら、いろいろなことに興味を持つ力を付けてほしいですね」

浜嶋団委員長は、まことを褒めた。

お母さんは、「そういう考えもあるんだな」と感じながら、さりげない言葉をスカウトに投げかけることが教育方法になっているように勝手に納得した。そして、お父さんと教育について話したことの答えを見つけたように思った。

それから、団委員長とお母さんたちの話は、盛り上がっていた。

「まこと君、次も来てね！」

ピザを食べ終わったところに、浜嶋団委員長は、そう言って次のお母さんのところに移動して行った。

「はいー！ パンができましたー！ 順番に持って行きます。席で待ってて下さい」

ブルーシートの外側で、ツイストを持ち上げながら、さっきのリーダーが大きな声で叫んだ。

まことは、

「お母さん、やっと食べられるよ。もう一度食べたかったんだ」

と言ってから、立ちあがって、大きな声を出した。

「おーい！ こっちだよー！」

まことは、飛び上がりながら手を振ってリーダーを呼んだ。

「ちょっと待っててねー！」

リーダーがまことに返事をした。

やっと回ってきたツイストは、さっきよりおいしかった。チョコレートやクッキーもいいけど、こんなおやつもいいものだ。

ツイストを食べ終わり、お茶を飲んでいるところに、浜嶋団委員長が若いリーダーをまことのお母さんのところへ連れてきた。ハットには、緑の房が付けてあった。

「ビーバー隊の隊長をやっている白木です。よろしくお願いします」

白木隊長が、さらに続けた。

「まこと君、こんにちは。おもしろかった？」

まことは、立ちあがって挨拶した。

「うん。白木隊長って臆病な探検家をやっていたリーダーでしょ！」

「そうだよ。よく覚えていたね」

「整列のときにかっこよくしていたから、覚えているんだ」

「ありがとう」

白木隊長は、かっこいいと言われて、少し嬉しそうに言った。

「隊長は、ほんとうは臆病じゃないでしょう？」

「そうだねー、でもあそこにいるときは臆病だったよ。動物が怖いから。まこと君、これからもう一つおもしろいゲームがあるから頑張るね」

「えー、そうなの。よおっし、頑張るぞ！」

まことは、ブルーシートの上で両足を広げた。そして、両腕に力を入れて、腰を左右に動かした。

「まこと君、それは何？　すごく気合が入っているね」

白木隊長は、笑いながら言った。

昼食も終わり、最後のゲームが行われた。

ボーイ隊の内田隊長の担当で、班対抗の風船割りだ。まことは最後まで残ったが、B班はA班に負けてしまった。けいこちゃんのいるD班が優勝した。

「ああ、悔しいけどおもしろかった」

あっという間に時間は過ぎ、表彰式が始まった。

「優勝は、D班です！」

「イエーイ！」

歓声があがった。

「D班は、全員前に出て横に並んでください」

浜嶋団委員長の前にD班が全員並び、首に優勝メダルをかけてもらっている。

メダルは、キラキラしていてきれいだった。

「いいなあ。あのメダルほしいなあ」

まことは、羨ましそうにD班の子たちを見つめた。

高井隊長が、ここでボーイスカウトの表彰について説明した。

前に立っている浜嶋団員長が、音頭をとった。

「D班、優勝おめでとう！」

「いやさか、いやさか、いやさかー！」

「ありがとう！　いやさか、いやさか、いやさかー！」

ボーイスカウトのメンバーは、大声で楽しそうにお祝いをした。最後は、拍手を贈る。体験者もそれを見て拍手をした。

まことは、「祝声っていいな。勝っても負けても楽しいや」と思った。それでも、メダルが貰えなかったことが忘れられなかった。

そこに、高井隊長が、思いがけないことを話した。

「今日は、グルメハンターのイベントに参加していただいてありがとうございました。体験に来てくれた子供さんたちに浜嶋団委員長から記念品のプレゼントがあります」

「やったー！」とまことは、うれしい顔に変わった。

記念品は、模様のある細いロープで編んだ「とんぼ」だ。青色、緑色、黄色、赤色がある。どれもきれいなものだ。体験した子どもたち20人だけに渡される。

浜嶋団委員長は、A班から順番に子どもたちの前に移動して手渡している。まことに近づいてきた。

「まこと君、また来てね。青いとんぼです。団委員長が作ったから大事にしてね」

「ありがとう」

手の上に青色のトンボが乗っている。10センチぐらいの大きさで、目、羽、胴が編んである。まことは、青いトンボを見ながら、なんだかボーイスカウトが好きになれそうだった。

最後に浜嶋団委員長が挨拶をした。

「今日は、家族でいろいろな体験をしてもらいました。皆さんは家族と一緒に楽しんでもらえたでしょうか。ボーイスカウトは、自然の中でも生きていけるようなゲームをしながら、みんなに遅く成長してほしいと思っています。楽しく遊ぶことと、遊びながら思いやりのところと感謝の気持ちを持つように育てほしいと思っています。豊中第2団が気に入ってくれたらいつでも遊びに来てください。今日はありがとうございました。じゃあ、またね。さようなら」

こうしてグルメハンターが終わった。

「どうだった？」

けいこちゃんのお母さんが、近づいてきた。

「あ、優勝おめでとう！」

「まこと君の班が優勝したらよかったね。どう？ ボーイスカウトっておもしろいでしょ？」

「そうね、いろいろなことやったし、ぐるぐる歩いたから疲れちゃった。でも、ボーイスカウトのこと、いろいろわかったと思うわ」

お母さんは、感謝の気持ちを込めて、返事した。

「そう。それは、よかったわ。じゃあ、これから片づけがあるのでまたね。まこと君、また遊びにきてね！」

そう言って、けいこちゃんのお母さんはみんなのところに戻って行った。

夕食前にお父さんが、にこにこしてまことに声をかけてきた。

「まこと、今日は楽しかったかい？」

まことは、すっと立って敬礼した。

「報告！ 今日はすごくおもしろかったです。あはははは」

「それなに？」

「まことは、ポイントハイクでやっていた班長の報告を真似ているのよ」

「なんか、すっかり成長したような感じだなあ」

お母さんが自分の感想を話した。

「そういえば、まことは少し成長したかな？ グルメハンターは、みんなおもしろかったわよ。いろんなことがいっぱいあったの」

「そう、まことは、何がよかったの？」

「うん、もちろん、ピザもスパゲティもそれから、あれって、なんだったかな？」

「ツイストのこと？」

とお母さんが説明した。

「それ。パンのことだけどね。僕とお母さんは、内緒で貰っちゃったんだよ」

「よかったね。ボーイスカウトとしては、何がよかったの？」

「うん、いっぱいあったけど、ロープ渡りとか風船割りとか楽しかったよ」

元気なまことは、冒険的なゲームが気に入っていたのだ。

「他にはどんなことがあったの？」

それで、まことは、一生懸命思い出そうとしていた。

「うーん、いろいろあったけど。林の中に入って行ってゲームをしたかな。お母さん、バトンタッチ！」

「はいはい。じゃあね。確か、運転手や魔法使い、冒険家、ワシなんかが待っているところを回って行ったんだよ。それぞれに特徴があったわ」

「どんな特徴なの？」

「うーん。運転手は簡単な工作をしたわね。魔法使いと冒険家は観察力や協調性を試しているわね。ワシは、勇気を試してるようだった。みんな話し方や衣装が面白くて、とても楽しかったわ」

「それって、まことたちへの教育と関係しているのかな」

「そうだと思うわ。4つのグループに分かれて、お昼時間まで順番にポイントを回るゲームをしたのよ」

それから、お母さんは、思い出して笑いながら説明を続けた。

「それがおかしいのよ。ウマーイ・ピザーロって言う名前のコックが出てきて、このリーダーは、白い帽子やメガネなんかで仮装していて楽しいの。うまく雰囲気を出していたわ」

というお母さんの言葉に、お父さんも羨ましそうな声で言った。

「ふーん。やっぱり、行ってみたかったね」

お母さんは、ボーイスカウトの感想として話を続けた。

「例えば、連絡窓口をしていただいた浜嶋団委員長からお昼に説明していただいたことだけど。楽しいことにすごく力を入れながら、ポイントハイクのときの整列をきちんとするところや、けじめをきちんとすることで、まことたち子供を育てているように思えるの」

「ボーイスカウトの制服は、礼儀正しいイメージがするよね」

「それに、リーダーさんたちは、面白くて親切だったかな。自分たちが楽しんでいる感じよ」

「まことは、そんなことを気が付いたかな」

「うん、なんかみんなが優しくてかっこよかったよ。なんか気持ちよかった！」

まことがそういうと、お母さんは嬉しそうに笑った。

まことが、さらに話を続けた。

「あのね、優勝チームをお祝いする祝声もよかったよ。僕、負けてるのに、思わず大きい声出しちゃってさ」

「そうね、負けても相手を祝福する気持ちになるよね。けいこちゃんのお母さんは、そういうところも気に

入っているのかな」

「それに、お父さん、これを見てよ」と言って、近くに置いていた記念品を取ってきた。

「こんなとんぼをもらったよ。記念品だって」

「それはロープでできているのかな。おもしろいね」

「お父さん、それはね。浜嶋団委員長が20個も作ってくださったんだって」

「ふーん。感動だね」

こうして、家族で楽しいひとときが続いた。

第2話 まこと、ビーバースカウトになる

グルメハンターの次の日、けいこちゃんのお母さんから電話があった。

ちょうど、まこととお母さんが夕食を食べているときだった。

「もしもし、山本です」

「原田です。昨日はごめんね。ありがとう」

「こちらこそありがとう。まことはとても気に入ってしまったのよ」

「それはよかった。実はね。今度、入隊式があるのよ。あと2週間しかないけど。昨日挨拶した白木隊長が、よかったら、見に来ないかって言ってるの」

お母さんは、興味があったのですぐに聞いた。

「入隊式っていうのは？」

「うん、けいこが正式に入隊することになるので、入隊セレモニーをするの。ひとみちゃんも一緒にね。お兄ちゃんはカブ隊に上がるので、上進式のセレモニーをするのよ」

お母さんは、まことはどうなるのかと思って聞いた。

「次の入隊式はいつあるの」

「うん、いつでもやっているけど、場所が公園になってしまうかな。建物の中で全員が揃ってやるのは、4月なのよ」

「そう、正直言って、これからも隊集会に参加させたいと思っているのだけれど、まことは早く入隊したいと思っているかな」

「すぐに入隊する人だっていたわよ。子供の気持ち次第だけど」

お母さんは、とっさにどうしたらいいかわからなかった。

「どっちがいいのかな」

「白木隊長は、今度2人が入隊式をするから、まこと君も一緒の方がいいかもしれないと思ったんだって。それで、確認させてもらうことにしたの」

「そう、ちょっと考えさせていただくわ」

と返事して電話を切った。

「お母さん、なんだって？ 僕の入隊式のこと？」

聞き耳を立てていたまことは、待ち切れずに聞いた。

「入隊式を見に来ないかっていうお誘いよ」

「僕は、すぐにでも入隊したいな。お父さんも言っていたじゃない」

「そうだったわね。相談してみましよう」

お父さんに話をした結果、お父さんは大賛成で、まことはすぐに入隊することになった。白木隊長が家ま

で来て、入隊の手続きを説明してくれた。制服はレンタルで貸して貰える。備品は、手元にあるものを使えばいいらしい。入隊セレモニーで大事なことは、ビーバースカウトの「やくそく」を覚えることだ。これを終わると、晴れてビーバースカウトになる。

入隊式は、あっという間にやってきた。場所は、豊中市生活情報センターくらしかんだ。豊中市役所と郵便局の間にある。国道176号線から東に少し入ったところだ。まことの通っている桜塚小学校のほぼ隣だ。通称はくらしかんと呼んでいる。この3階にイベントホールがある。廊下の向いに会議室があり、控室代わりに借りることにしている。

まことは、いつもより30分早く起きた。

「お母さん、おはよう」

「おはよう。まこと。今日は頑張ってね」

「うん。頑張るよ。これを見てよ」

そう言うと両足を広げて、両腕に力を入れて、腰を左右に動かした。

「まこと。その調子だね」

「今日は頑張るぞ」

お母さんは、まことの心意気を頼もしく思った。

くらしかんのイベントホールに、各隊のスカウト、指導者、団委員、そして保護者の全員が集まった。浜嶋団委員長長の挨拶の後、いよいよ入隊式が始まる。

司会の谷川副団委員長が宣言した。

「ただいまより、入隊式を行います。ビーバー隊からお願いします」

フロアーに座っていた白木隊長が正面中央に出てきた。

「ビーバー隊のスカウト、保護者、指導者は前に整列して下さい。

入隊するスカウトと保護者の皆さんは、『ちかいのはし』のところで待って下さい」

まこととけいこちゃんとひとみちゃん家族は、入口のところへ移動した。

まことは、お母さんを見上げながら、小さな声で言った。

「ちょっと緊張してきたわ」

「大丈夫よ。ちゃんと練習したでしょ」

けいこちゃんのお母さんも言った。

「まこと君なら大丈夫よ。頑張ってね」

ビーバー隊のリーダーとスカウトたちが、正面に整列した。

藤橋副団委員長兼ビーバー隊副長が、ビーバー隊の司会を始めた。

「藤橋です。最初に、入隊式のセレモニーの意味をお話します。

豊中第2団に入団する意味とビーバー隊に入隊する意味を込めて、『ちかいのはし』をスカウトと保護者が一緒に渡っていただきます。ボーイスカウトは、スカウト本人だけでなく家族で団に所属します。家族を含めて2団の仲間になります。

『ちかいのはし』を渡ることは、困難な状況にあっても、それを自分と家族の力で乗り越えることを象徴しています。このときに会場に参列した仲間が祝福と激励の拍手、そして声援を送ります。全体の気持ちと一緒に、『ちかいのはし』を渡り終わると、私たち全員が仲間になります。

次に、スカウトは、1人ずつビーバースカウトの『やくそく』を大きな声で言って、ここに参列するすべての仲間にちかいを立てます。ここで大きな拍手をお願いします」

藤橋副長は、ひと呼吸してから、さらに続けた。

「会場の皆さん、これから2団そしてビーバー隊に新たに3名のスカウトとご家族が加わります。『ちかいのはし』を渡るときに、盛大な拍手をお願いします。それでは、名前を呼ばれたら返事をしてから、渡って下さい。山本まこと君！」

「はい！」

少し声が上ずっていた。

まことが、お母さんの方を見ると、「さあ、渡ろう」というような顔をしたので、ゆっくり歩き始めた。

拍手が始まるのが、まことに聞こえた。

「ちかいのはし」は、短い欄干が2つ並んでいる。その真ん中をゆっくり渡っていく。まこととお母さんは、拍手で元気をもらった気分になった。渡り切ってから白木隊長の前で立ち止まった。

白木隊長が、敬礼をしたので、まことも敬礼をした。

「入団おめでとう。ビーバー隊は、まこと君家族を仲間として迎えます」

まことは、ちょっとにこっとした。

下北副長が、横から手招きしたので、白木隊長の横を下北副長の方へ進んで行った。そこで体を前に向けると、全員がまことの方を見ているのが分かって、また緊張した。

「つぎは、原田けいこちゃん」

「はい！」

やがて、けいこちゃん家族がまことの横に並んだ。

ひとみちゃん家族も同じように横に並んだ。

今度は「やくそく」を言う。

「これで、ビーバー隊に新しい仲間が加わりました。ここで、スカウトが『やくそく』を行います」

白木隊長は前にでて、右を向いた。隊旗を縦に持っている下北副長も白木隊長の横に立った。川谷副長がネッカチを持って白木隊長の後ろにいた。

「それでは、スカウトは大きな声で『やくそく』をしてもらいます。

山本まこと君、保護者と一緒に前に進んで下さい」

まことは、後ろからお母さんに押されて、前を出てから左を向いた。お母さんは後ろに立っていた。

白木隊長が、にっこりほほ笑んだ。

ここで、下北副長が白木隊長とまことの間になるように横に移動していた。そして、持っているビーバー隊の隊旗が、まことと白木隊長の間にゆっくりと下ろされた。

そこで、音楽が流れ始めた。

「ひとたび スカウトに . . .」

まことは、教えられた通りに左手で上から隊旗を持った。白木隊長が同時に下から隊旗を支えていた。それから、右腕を横にしてスカウトサインのポーズをとった。白木隊長も同じようにした。

『やくそく』を言ってください」

まことは、体が少しこわばってきた。昨日あれだけ練習したから大丈夫だと心でつぶやいた。

「ぼくは

みんなとなかよくします

ビーバー隊のきまりをまもります」

まことは、みんなに聞こえる大きな声で言った。そして、両手をズボンの横に下ろした。隊旗が、上に上がっていくのが見えた。

会場から大きな拍手が鳴り響いている。

音楽は、続いていた。まことは厳かな雰囲気を感じて胸が「じーん」とした。

「. . .ちかいをたてて なりし身は

いつもいつも スカウトだ . . .」

「大きな声で言えたね。おめでとう！」

白木隊長が会場に聞こえるように言った。

「ありがとう」

まこともお礼を言った。

それから、白木隊長は、まことが付けていた体験用のネッカチーフを片方からすると、うまく外した。川谷副長から真新しいビーバー隊のネッカチーフを受け取り、両手でまことの首の後ろに回して、首にかけた。紺色の布に赤色と水色の線が取りつけてあって、胸のところで端を揃えた。そこにリングを下から首まで引き上げた。まことは、真新しいネッカチーフが付けられてすごく気持がよかった。

それから、白木隊長は、頭にビーバーキャップをかぶせた。

「これで、りっぱなビーバースカウトになりました」

お母さんが後ろから「よかったね」と声をかけてくれた。

まことは、その声でちょっと安心して、「ふー」と息をはいた。やっと、ビーバースカウトになったのだ。たくさんの人が拍手してくれるのが聞こえてきて、頬が少しゆるんできた。

けいこちゃんもひとみちゃんも無事に終わった。

白木隊長が、3人のスカウトとお母さんたちに一緒に楽しみましょうと激励した。

続いて、司会の藤橋副長が言った。

「それでは、今入隊したスカウトとご家族がビーバー隊の仲間と一緒にになります。下北副長、お連れして下さい」

下北リーダーが、3つの家族をたかし君やけいた君が並んでいる隣に連れて行ってくれた。お母さんはスカウトの後ろに立った。これで、ビーバー隊の仲間になった。

「これで、ビーバー隊の入隊式を終わります。全員敬礼……。全員席に戻って下さい」

藤橋副長の言葉で、まことたちのセレモニーは無事に終わった。お母さんの目を見ると、これから頑張っ
てねと言っているように感じた。それで、なんだかうれしい気持ちになった。

夕方、6時を過ぎると、まことは、夕食の準備をしているお母さんの周りをうろうろしだした。

「ピンポン」

まことは、ビーバーキャップを被って玄関まで走った。

「あ、ビーバースカウトだ。おめでとう」

「ありがとう」

まことは、ビーバー隊の敬礼を試みせた。

「おお、かっこいい！」

そして、ご飯の時間になった。

「お父さん、僕、しっかり『やくそく』が言えたよ」

「それは、よかったね」

まことは、誉められてにこにこした。

お母さんは、入隊式を思い出しながら言った。

「入隊式は、感動する仕掛けがあったわ」

「へえ、感動するって、どんなことだったのかな？」

お母さんは、「ちかいのはし」を渡るときに会場全員から拍手をもらったことやその時に「永遠のスカウト」の曲が流れる中で厳粛な雰囲気
のセレモニーが行われたことを話した。

お父さんもうれしそうになって言った。

「そういうセレモニーは、ボーイスカウトのいいところだね」

「そうなのよ。楽しいこともやるけど、厳粛な雰囲気はそんなに体験することはないでしょ」

「身体も気持ちも成長させてくれるのは、いいね」

「入隊してよかったわ、お父さん。ボーイスカウトはね。間違いなく子供たちを教育することが目的なのよ」

「そうだったね。まことの成長が楽しみだな。まこと、頑張ろうね」

まことは、ピースサインで返事をした。そして、お父さんにも「やくそく」をしてもらおうと思った。

「お父さん、いいことを思いついたよ。お父さんも『やくそく』をして！ お父さんは隊集会に出てくることを守ること」

それで、お母さんもお父さんに頼んだ。

「じゃあ、お父さんも『やくそく』をしてもらいましょう。さあ、立ってください。腕を横にして指を2本にしてください。かっこよくやってね」

「ははは、そうだね。じゃあ、やってみよう。こうかな？」

お父さんは、椅子の後ろに回ってスカウトサインを試みせた。

「まこと、これでいいのかな。うん、じゃあ、それでは、お父さん言ってください」

「お父さんは、隊集会に参加することを守ります」

「お父さん、よくできました。これで、お父さんも2団の家族になりました。おめでとう」

お母さんがそう言うと、3人で笑った。

第3話 箕面の滝で自然とのふれあい体験

まことは、今日も早く起きた。でもどうしたのか、なんだか元気がない。

「おはよう。お母さん、やっぱり今日は行けないの？」

「そうね。残念だけど」

「じゃあ、お父さんが代わりに行ってくれたらいいのに」

「お父さんは、なかなか行けないのよ。だから一人で行ってくれる？」

「ふーん」

「まこと。さあ、いつものポーズを見せてよ」

まことは、両腕をだらっと垂らして、腰をゆっくり動かしたただけだった。

「お母さんが行かないと力が入らないわ。へへへへ」と弱々しく笑った。

「まことは、大丈夫よ。さあ、元気を出して！」

お母さんは、そう言いながら、まことがいつもするポーズを力強くやって見せた。そして、

「イエーイ！」と大きな声を出した。

今日は、真夏本番の好天に恵まれた。朝から暑い日差しが降り注いでいる。

箕面の滝には電車で行くため、阪急豊中駅が集合場所だ。豊中駅は線路の北東側に高架の人工広場を持っている。そこは広くて多くのボーイスカウトやグループが集合するのに都合がいい。高架部分に改札口があり、ホームにはさらにもう1階上がる。

駅前の交差点の階段を上がると豊中駅の人工広場になる。そこから改札口まで少し歩かないといけない。176号線に近いところに一つの世界（平和青年像）という銅像が立っている。右手が空に向けて上げられており、翼を広げて今まさに飛び立とうとする鳩を手になっている。また、広場中央には、複数の鐘をならすカリヨンがある。1階に下りる階段はバス停につながっている。カリヨンの周囲の屋根は濃い日陰を作っている。その左側の駅舎の中にある改札口に近いところにみんなが集まっているのが見えた。もう、けいこちゃんは来ていた。白木隊長と話をしている。近づくと隊長がまことに声をかけた。

「おはよう」

「おはようございます」

「まこと君、きちんと挨拶できたね」

白木隊長は、まことの挨拶を聞いて、自信を深めてもらうために誉めた。

お母さんは、メールで連絡していたが、もう一度、白木隊長にまことのことを頼んだ。

「わかりました。大丈夫ですよ。ご心配なく」

「まこと、ちゃんと頼んでおいたからね」

「うん。わかった」

「まこと君、へいきだよ」と白木隊長もまことを励ました。

まことは、他のスカウトのお母さんたちを眺めてから、今日は一人でも頑張ろうと思った。

白木隊長は、改札口に近いところで声を上げた。

「集合！」

指導者たちが先に並んだ。7月に行った舎営では、指導者とスカウトが競争して集合をしていた。この競争が続いていたのだ。スカウトたちが自主的に並ぼうとするまで続けようとリーダー会議で決められていた。

この場では、開会儀礼を行わずに下北副長が一人ずつ切符を渡し始めた。すぐに出発するのだ。

下北副長は、切符を配り終わったことを白木隊長に報告した。

「全員切符をもらったかな。開会セレモニーは箕面駅でしますからすぐに電車に乗ります。一列で付いてきてね。切符を持って改札口を通ってください」

「まこと、気を付けるのよ。リーダーの言うことをよく聞いてね！」

まことは、振り返ってお母さんを見た。

「わかったね！」

「わかってるよ。バイバイ」

まことが改札機を通る時、「ぴよぴよ、ぴよぴよ」という声が改札機から聞こえた。コンコースの奥に進んでから、白木隊長が立ち止まって後ろを向いた。

「はい、切符をポケットにしまってください！ 無くさないでね！ 切符を入れたところを覚えておいてね！」

まことはズボンのポケットに切符を入れて、2回取り出して大丈夫だと思った。横で、それを藤橋副長が見ていた。

「まこと君、それで大丈夫だね」

まことは、にこっと笑みを浮かべた。

それから、トイレに行く人を待ってから、白木隊長はみんなを連れてホームに向かってまっすぐ歩き出した。そして、エスカレーターを左に見ながら階段の方に進んでいく。

「あれっ、階段を上がるの？ エスカレーターに乗ればいいのに！」

まことの一人言に、横を歩いていた藤橋副長が言った。

「まこと君、階段を上がると体が強くなるよ。体を鍛えようね。ボーイスカウトはできるだけ階段を使うことにしているから、頑張ってください」

まことは、返事をしなかったが、そういうことかと思って、しっかり階段を上がった。別にどうってことはなかった。それに、気持がいいと思った。

参加人数は、スカウトが5人、お母さんが4人、リーダーが5人で14人となった。白木隊長は、3つのグループに分けて、乗り込むドアの位置を副長たちに指示した。分かれた方が乗りやすいということは、まことにも分かった。

まことは、ひとみちゃんとお母さん、浜嶋団委員長、吉川団委員のグループになった。

電車が左から走ってきて、ホームに止まった。宝塚方面の電車の席は、けっこう空いている。

浜嶋団委員長は、乗り込んだ後、真っ先に座りながら言った。

「みんな座ってもいいよ。でも、お年寄りや妊婦さんが入ってきたら席を譲って上げてね」

「あっちのグループはみんな立っているよ！」

まことが、下北副長のグループを見て言った。

「隊長や若いリーダーは元気だからね。でも、みんなが立っていたら中を歩く人の迷惑になるでしょ。団委員長は、席を譲ってあげることができたら気持ちがいいから、いつも座ることにしているんだ。みんなもそうしたらどうですか。勇気を出して席を譲ってみようね」

まことは、安心して座った。そして、隣にひとみちゃんとお母さんが座った。

「ひとみちゃん、席を譲ること、できると思う？」

「わからない。いままで譲ったことないし、考えたこともないもん」

「そうだよね。そんな人は、来ないでほしいなあ」

ひとみちゃんのお母さんも、「お年寄りが乗ってきたら2人で替ってあげてね」と言った。

まことが心配しながらドキドキしている間に石橋駅に着いた。豊中駅からたった2つ目の駅だ。ここで乗り換えだ。電車を降りたら、ホームでまたスカウトと指導者は競争して並んだ。人がいなくなるまで待つから歩き出した。

箕面方面は線路の反対側になるので、階段を下りた。地下道を進み、右側の階段を上ると、すでに箕面行き電車が止まっているのが見えた。4両編成の電車の横を先頭の方に歩いていく。

まことは歩いている間に電車が出発してしまわないかと気になった。

電車に乗り込むとすぐに発車した。箕面駅は、阪急桜井駅、牧落駅の次だ。また席に座ったまことは、箕面駅まで席を譲るようなことになるか心配だった。緊張のせいか少し気持ちが疲れている。

ところが、牧落駅で女性の2人づれが乗ってきた。一人はかなりお年寄りに見えた。団委員長は、まこととひとみちゃんの方を向いて、お年寄りを手で示しながら、口を動かして「替わってあげて」と言っているようだった。でも、2人とも口も体も動かなかった。

すると、団委員長は、「ここに座ってください」と席から立ち上がりながら声をかけた。

「あら、ありがとう。でも、次の駅で下りるのよ」

と遠慮したが、団委員長は、「どうぞ、どうぞ」と言って座っていただいた。そして、まこととひとみちゃんを見ながら、にこっと笑った。

まことは、それを見て席を譲るのはこういうことなのかと思った。

電車は、箕面駅に到着した。先頭車両からホームに下りた。改札口が前にあるので、電車を下りたお客さんがホームを通り過ぎるまで、しばらく待たないといけなかった。

さっきのお年寄りが、団委員長の前を通る時に「ありがとう」と声をかけて通り過ぎて行った。

「切符を出してください」

白木隊長や副長たちが、口々に言った。

まことは、ポケットに手をいれた。

「あった。よかったわ」

切符があるのは当然のことだけど、安心した。

改札口を出ると広場にハイキング姿の人たちがあちこちに固まって話をしたり、歩いている人もいた。山に登る人たちだ。豊中駅とは雰囲気が違う。

副長たちは、すばやく周りを見ながら、開会儀礼の場所を確認した。そして、隊旗を立て始めた。

「あそこに行きます」

白木隊長は、スカウトたちを副長が準備しているところに誘導した。

隊長は、開会の挨拶でこんなことを話した。

「ボーイスカウトの良いところは観察することが得意ということです。歩いていても、周りの様子をととても注意深く見ることができるようになります。自然の中はいっぱいおもしろいものがあるよ。大きな2つの目でしっかり見てください」

セレモニーが終わって、昆虫博物館に出発した。

まことは、白木隊長が先頭で歩き出したのに、浜嶋団委員長と吉川団委員が見送っているだけでついてこないことに気付いた。

「あれ、けいた君、団委員長がこないよ」

けいた君が、振り向いて団委員長を見た。

「どうしたのかな。なにかありそうだな。まこと」

「絶対何かあるよ」

白木隊長は、道を渡って右側に曲がって進んだ。スカウトたちは、何も教えられなかった。

ビーバー隊の一行は、細い道を左、右、そしてまた左に曲がった。

「ややこしいなあ。おまけに坂道だよー」

まことは、ちょっと急な坂道で汗がでてきた。

上りきったぞと思ったら、すぐに下りになった。

「けいた君、なんでこんな道を歩くのかなあ」

「そうだよ。本通りを歩けばいいのにね」

下り坂の先は、左側の広い道に合流している。そこをたくさんの人が歩いているのが見える。

ビーバー隊は、土産物屋が並んでいる道の裏側の坂道を歩いてきたことになる。ここは誰も歩いていない。何かありそうだと思ったが、この道には何もなかった。ただ、日影があつて涼しかったことだけがよかったことだ。

坂道の下で浜嶋団委員長がカメラを構えて見上げている。何枚か写真を撮ったようだ。

まことが聞いた。

「団委員長は、どうして一緒に来なかったの？」

「うん、ちょっと用事があったし、下見で坂道を歩いたらしんどかったからね」

まことは、「ますます、これは何かある」と思ったが、黙っていた。

それから、すぐ先にある橋を渡ると右側が川になって道が川と平行に続いている。川の中がよく見える。

川の回り角に昆虫館があった。裏はすぐ山になっていた。

昆虫博物館は、小規模であるが標本の数は豊富でビーバースカウトの興味を引き付けた。普段見られない大きな昆虫たちを見ていると壮観である。また、生きたアゲハチョウが飛び回っている部屋もあり、身近に感じる臨場感に驚かされる。浜嶋団委員長が、係の人に質問をして、蟬が1週間の命に対してチョウは2週間の命ということがわかった。昆虫たちの命は短い。

スカウトたちは、思い思いに見て回って楽しんだ。

30分程度で見学は終了したが、昆虫に関するプログラムが待っていた。

「さあ、お話をするから、ここに並んで下さい」

白木隊長に言われて、スカウト5人が花壇の縁に座った。そこは日陰になっていて涼しい。指導者たちが前に立った。お母さんたちは、その後ろで見ている。

「これから、団委員長から『アリとキリギリス』の話をしてもらいます」

浜嶋団委員長がスカウトの正面に立った。

「じゃあ、今日は昆虫のテーマだから、『アリとキリギリス』の話をします」

「わたし、知ってるよ」

そう言った後、けいこちゃんが、そのままぺらぺらと話し出した。全然止まらずに話をしている。

浜嶋団委員長は、口を挟むことができないまま黙って聞いている。スカウトや指導者も黙って聞いている。

「夏に、アリは一生懸命食べ物を蓄えるために働いているけど、キリギリスは仲間と遊びまくっていて、秋になっても遊んでいた。ところが、冬になると食べ物が簡単に見つからなくなって困ってしまった。それで、キリギリスは、アリのことを思い出して、アリに食べ物を分けてもらって、助けてもらったの」

「すごいね！ けいこちゃん」

浜嶋団委員長やスカウト、リーダーたちも口々に言った。

「すごいよ！」

「けいこちゃん、すごいなあ！」

とても上手に話したのでみんなはびっくりしてしまった。

「けいこちゃん、団委員長は話すことがなくなっちゃったよ。すごい。でも、この話は、あと2つあることを知っているかな？」

「どういうこと？」

みんなは、別の話に興味を持って、また静かになって浜嶋団委員長を見た。

「冬になってキリギリスがアリに食べ物をお願いするところまでは同じだよ」

「ああよかった」

「けいこちゃんは、アリがキリギリスに食べ物を上げたというお話だったね」

「そうだよ」

「他の話というのは、アリは食べ物をあげなくて、キリギリスは死んでしまうお話だよ」

「そんなのはキリギリスがかわいそうだよ」

黙って聞いていたひとみちゃんが言った。

「そうだよね。でも、キリギリスは夏も秋も働かなかったから悪かったと思うよ。みんなはどう思う？」

「私は、親切なアリが好きだな」

けいこちゃんは、真剣に言った。

「けいこちゃんのお話は親切なアリだったね。でもね、アリが一生懸命働いていたときに、キリギリスは、遊んでいたでしょう。そのときに、アリはキリギリスに働いた方がいいよ、食べ物を準備した方がいいよと言ったと思うよ。でも、キリギリスは言うことを聞かなかったんだね。だから、アリは食べ物をキリギリスに上げなかったのだと思う」

「う～ん。そうかもしれないけど、困っていたら助けてあげる方がいいでしょ」

「そうだね。それもいいことだね。このほかにも、いろいろな場合があることを考えてみたらどうかな」

「もう一つの話はなに？」

「これは難しい話だから、みんなに分かりにくいけど、話そうか」

「とりあえず、話してよ」

また、けいこちゃんが言った。

「じゃあね。キリギリスは食べ物をもらえなかった。そして、死んでしまった」

「さっきと同じじゃない」

「ここからちょっと違うからね。このお話は、その続きがあります。みんながわかるといいけど。」

キリギリスは、もう死にそうになったとき、『僕は、自分のしたいことをいつもいつもやることができた。とても楽しかった。すごく幸せだった。だから、もう死んでもいいや。充実した人生だった』と言いました。一生懸命楽しんだから死んでも悔いは無いと思っている」

「それはなんのことかわからない。死んでしまったらだめじゃない。親切なアリがキリギリスに食べ物をあげる話の方がいいわ」

「わたしもわからない」

けいこちゃんとひとみちゃんは「ねー」と互いに顔を見合わせた。

「ごめん、ごめん。みんな一生懸命考えてくれてありがとう。また、大きくなったら考えてみたらいいよ。はい、時間です。終わります」

まことにも、浜嶋団委員長の話はよくわからなかった。

昆虫博物館から、30分ぐらい歩いた。途中で急な道がいくつかあって、右側は深い谷に変わっていった。そこでは、森が深くなり、野鳥観察をしている人が三脚を立てた望遠鏡を覗いていた。観光で来ているグループが多いし、自転車で上がってくる人もときどきビーバー隊を追い越していった。

「あそこを過ぎると滝が見えるよ」

やっと滝に近づいた。けっこう疲れてきたので、お店の建物の向こうに滝が見えた時は、みんなほっとした顔になった。

30mの高さからドドッと水が落ちてくる滝の周りには、たくさんの人が見入っていた。手前の広場のベンチでは、みんな涼しそうに座っている。お弁当を食べている人もいる。

「滝は、気持がいいなあ」とまことはつぶやいた。

ビーバー隊は、観光客が多かったので、滝の近くまで寄ることができず、手前の橋のあたりで止まった。そこから、しばらく滝を見ていた。

浜嶋団委員長が、ポケットからカメラを取り出して言った。

「ここで記念撮影をしよう。ここは、後ろに滝が入る絶好の撮影場所だよ」

ところが、橋の上は人がいっぱいだ。

そこが、すっと空いた。30人ぐらいの団体が、橋の奥に移動して行った。その団体の人と下北副長が話し始めた。それで、その団体が西宮のビーバー隊ということが分かった。写真を撮る場所を譲ってくれたので、リーダーにお礼を言っているのだ。4人のリーダーだけが制服を着ていたが、後は普通の服を着た子供やお母さんばかりだ。

2団も急いで写真を撮った。そして、反対側を向いて滝を眺めた。

白木隊長が言った。

「よっし、滝はしっかり見ましたか。」

では、ここでスケッチを書いてもらいます」

「ええっ、スケッチ？」

とたけし君が振り向いて隊長に言った。

「みんなにスケッチ用紙とバインダーを渡します。10分間で書いて下さい。駅で話しましたね。観察です。印象が強いところを探して書いて下さい。後で発表してもらいます」

ここで、藤橋副長と浜嶋団委員長が、小走りに元の道に戻りだした。休憩所の確認と確保のためだ。

白木隊長は、みんなに注意を与えた。

「人がいっぱいいるから気を付けて下さい。お母さんと一緒に行動して下さい」

「はい」とスカウトが返事をする。

「まこと君、リーダーと一緒にスケッチしようか」

下北副長が、まことに声をかけた。

「ああ、よかったわ」

まことは、お母さんがいないことを寂しく思ったところだった。

「どこでスケッチしたい？」

「どこにしようかな。滝が見えるところ、滝の近くがいい」

まことは、下北副長の目を見た。

「じゃあ、あっちに行ってみる？」

「うん」

まことは、満足げに休憩用のベンチが置いてある方に歩き出した。

「リーダー、ここにするわ」

滝が正面に見えるところで腰を下ろした。

「じゃあ、自分の気に入ったところを探そうね」

「わかった」

じっくり滝の水を眺めてから、間近に見える滝のしぶきが落ちる水から描き始めた。

あっという間に時間が立った。

「まこと君、時間になったから行こうか」

「まだ、描けていない」

「大丈夫。全部描けなくてもいいよ。それで気持ちが分かるよ」

2人は、橋で待っている白木隊長のところに戻った。

「隊長、もう、滝は終わりなの？」

「ご飯の時間だからね。弁当を食べる場所に移動するよ」

他のスカウトとお母さんも帰ってきた。

「みんな揃ったね。スケッチは描けたかな」

「全然だめ。ちょっとだけ」とスカウトたちが答えた。

「そう、いいよ。何を描いたか後で説明して下さい。スケッチ用紙を集めるね」

白木隊長は、スケッチ用紙とバインダーを受け取ってから出発した。滝と反対方向にある階段の方に歩き出した。

まことは、「どこに行くのかな」と思ったけど、黙ってついて行った。

山の上に登る階段があった。それを50メートルぐらい進んだ。人が階段を行き来しているが、この先は、滝の上の駐車場に続いている。車で来る人が多いのだ。

「こんなところに休憩所があるわ」

入口で藤橋副長と浜嶋団委員長が待っていた。この休憩所を利用している人はいなかった。

「ここは、涼しいねえ！」

と白木隊長が言った。滝まで来ると駅のあたりとは気温が5度ぐらい下がっている。

「このテーブルに分かれて座って下さい。椅子にレジャーシートを敷いてね。弁当とお茶も出して下さい」

まこと以外のスカウトはお母さんと一緒に座った。

「まこと君、一緒に食べようか？」

浜嶋団委員長が、お母さんの代わりに隣に座った。

「じゃあ、弁当の準備ができたかな。歌を歌うよ」

白木隊長がいつものご飯の歌を歌い出した。みんなも歌い出した。まことは、相変わらず口をパクパクしているだけでしっかり歌えない。たけし君、けいた君、けいこちゃんは、適当に声を出していた。大きな声を出しているのはリーダーばかりだ。でも、リーダーは楽しく歌っている。リーダーたちは、こういうときは意識的に陽気にしているようだ。

弁当を食べ終わったときに、白木隊長が何かを持ちあげた。

「さあ、お腹はいっぱいになったかな。それでは、じゃーん！」

袋をぶらぶらさせた。中には茶色のものが入っていた。

「箕面の名物、もみじ饅頭！」

「嘘だよー。もみじ饅頭は広島でしょ！」

「はは、そのとおり。箕面は、もみじのてんぷらです。団委員長と吉川団委員が買ってきてくれました」

「それで、別の道を歩いていたんだ！」

「そうです。せっかく箕面の滝にきたから、名物のもみじのてんぷらを食べさせてあげたいなとリーダーたちで考えました。買ってきてもらったんです。みんなは食べたことがあるかな」

「ない」

「ありませーん」

「みんな初めてだね。良かった。一つずつ渡します」

もみじのてんぷらが、みんなに配られた。

「食べていいよ。おいしいかな？」

もみじの葉っぱの味はなかなかわからない。こんがりしてパリッとしている。

「どうだった？」

「おいしい、おいしい。もっと食べたい」

「それはよかった。今日はこれで終わりです。今度来た時に食べて下さい」

白木隊長は、今度はスカウトが描いたスケッチを持って、みんなに声をかけた。

「それでは、みんなが描いてくれたスケッチを発表してもらいます。順番に前に来て下さい」

「最初にけいた君」

「はい」

「いい返事だね。こちらに来て下さい」

「全然時間が無かったから描けていないよ」

白木隊長は、けいた君のスケッチをみんなに見せながら言った。

「けいた君は、何を描いたのかな。描きたいと思ったところだけ説明して下さい」

「それなら、滝を描いたんだ」

細い線で滝らしい形が描かれてあった。

「これが滝だね。元気な滝だね。いいじゃない」

藤橋副長が拍手をした。他の人の拍手が続いた。

他のスカウトも滝やその周りの樹木などを描いていた。

「みんな短い時間で良く描けています。しっかり見たことを描けたと思うよ。よかったですと思います」

白木隊長は、スカウトを誉めた。スカウトたちは、全然描けていないと思っていたが、白木隊長の言葉で安心した。

まことも、自分の描いた滝が伝わったことで下北副長が気持ちが分かると言っていたのがそのとおりだったと思った。

「そろそろ出発します」

白木隊長が合図した。

桜広場まで移動する。来た道を半分以上戻る。ただ、桜広場は山の斜面にある。

スケジュールに余裕が無くなってきたので、ちょっと遅れるスカウトには、浜嶋団委員長が後ろから「急いで！」と急かす。スカウトは、前にいる白木隊長のところまで何回も駆け足で走っていた。

ちょうど真ん中ぐらいまで戻って、右の山の方へ階段を上がると、野口英世の銅像がある。

「しんどい、しんどい、あっ、あっ、しんどいぞ。頑張るぞ」

と自分を励ますように浜嶋団委員長は階段を上っている。

まことは、「団委員長は、いつも煩いな。静かにできないのかなあ」と思った。

小さな銅像だ。なぜここに銅像があるかを、白木隊長が説明した。

「野口英世を知っているよね。黄熱病を研究した人で、すごく有名な人だよ。野口英世は、お母さんを連れてここに来たことがあるからここに銅像があるらしい」

みんな黙ったまま、興味深く銅像を見ている。

すぐに移動を始めた。少し階段を下りたところに別の道がある。白木隊長は、元の道に戻らず、一人しか歩けない狭い山道の方へ歩き出した。道は山腹をくねくねと続いていく。前に進むにつれて、だんだんと暑くなってくるのを感じた。桜広場に着くと広場全体が太陽の強い日差しを浴びていた。

「へー、こんな場所に広場があるのか」

山道を歩いているのに広場があるのが不思議だった。トイレもある。しかも人がいないことがいい。ビーバー隊は、他の団体に迷惑をかけずに活動できることがメリットだ。

「日陰にザックを置いて下さい」

白木隊長は、木の影がある所までスカウトを誘導した。そこに、ザックが一行に並べられた。

桜広場で行うゲームに時間の余裕がなくなっていた。リーダーたちは、3つのプログラムを5分ずつでやると決めた。

最初は、白木隊長の担当だ。

「では、ここで虫探しを始めます」

「ええー。虫なんかいないよ」とけいた君が言った。

「そうかな。みんなが行くと虫たちがびっくりして飛び出すと思うよ。虫に優しくしてあげようね。取ったらリリースしてあげよう。じゃあ、5分間です。スタート！」

まことは、期待してちょっと斜面になった草地に急いだ。

「あ、いるぞ。いっぱい、いるぞ」

みんなの顔が生き生きとしてきた。草地を動き回りだした。

「いたよ。こっちにいっぱい、いるよ。手でもつかまえれそう」

けいこちゃんが、大きな声を出した。

草地を歩くとバッタが草の中からぴょんぴょん跳びだしてきた。大きいバッタはいない。おんぶバッタばかりだ。しばらくするとスカウトたちは右手と左手にバッタを持っていた。

「はい、終了ー！」

「ええー、もう終わりー！」

スカウトから不満の声がでた。

「さあ、バッタを逃がしてあげて下さい」と隊長が言った。

あっという間に虫探しは終わってしまった。

「次は、大声コンテストを行います」

白木隊長が、そう言った後に、浜嶋団委員長がスカウトの真ん中に立った。

スカウトたちは、気持ちを切り替えられそうになかった。

「虫取りの方がおもしろいわ」とたけし君が言った。

リーダーは、吉川団委員と下北副長の2人だけだ。始める前に、浜嶋団委員長は、2人に何やら話をした。

それから、スカウトに向かって言った。

「じゃあ、おもしろいことをしましょう。私の名前は、大声出す三だ。今から大声コンテストを行う。スカウトとリーダーで競争してもらおう。団体戦だよ」

「ええ、団体戦って？」

けいた君が聞いた。スカウトは、競争という言葉に興味を示した。

「ひとりずつではなくて、リーダー組とスカウト組でどちらが大きな声を出せるかを競ってもらいます」

浜嶋団委員長に続いて、さらに吉川団委員がスカウトに挑戦的に言った。

「リーダーは2人だけど、スカウトには負けないぞ」

これにけいた君が反応した。

「僕たちの方は5人だよ。絶対勝つからね」

虫取りのことは頭から消えたようだ。さあ、競争が始まる。

「はい、準備できたかな。では、一番大きな声を出せそうな言葉は、なんだろう？」

それは、『きゃー』だ。きゃあとってもらう。

最初にリーダーから言ってもらおう。リーダー、どうぞ」

「きゃあー？」

「ええー！、小さいなあ。これだったら、スカウトの方が大きいだろう」

「スカウトの番です。スカウト、どうぞ」

「きゃあー！」

「おお、リーダーよりは大きいな。リーダー負けるな。リーダー、どうぞ」

「きゃあー」

「大したことはないな。全然だめじゃない。スカウトの方が大きいなあ」

スカウトたちは、指導者たちよりも大きな声が出て、大声出す三先生が誉めてくれるので、少しずつ楽しくなってきたように見える。

「スカウトは、もっと大きな声を出してリーダーに教えてあげてください。はい、どうぞ」

みんな、思い切り大きな声を出した。

「きゃー！！」

「すごいな。だんだん、大きくなってきた。リーダー頑張れ！ はい、リーダー」

「きゃあー！！！」

「よし、大きくなった。スカウトがこれよりも大きかったら勝ちだ。はい、スカウト」

「きゃあー！！！」

「あははは、スカウトの勝ちー。

みんな良く頑張った。もう一度、全員で声を出そう。はい！」

「きゃーー！！！」

スカウトたちは、浜嶋団委員長に乘せられて大きな声を出せた。指導者たちに勝って満足げだ。

「吉川さん、下北副長、作戦は成功したね。うまくできたよ」と浜嶋団委員長は、耳打ちした。

最後のゲームになった。藤橋副長が出てきた。

「大きな声が出せましたね。大事なことからよかったよ。さあ、いまから、自分の名前と年齢を英語で言う準備と練習をします。それは、マイネーム イズ 誰誰。 アイ アム シックス イヤーズ オールドと言います。この紙に、これをカタカナで書いて下さい。一人ずつ違うからね。書き終わったら、言葉に出して下さい。大きく言えるようになったら、大声出す三先生の所に言ってテストを受けて下さい。合格したら修了です」

「どうして英語なんかするの？」

けいた君が聞いた。

「はい、いい質問だね。実はね。8月9日にドイツのスカウトがビーバー隊に来てくれます」

「どうして？」

「明後日から世界スカウトジャンボリーが始まります。世界から2万8千人のスカウトが日本にやってきます。すごいでしょ。山口県の瀬戸内海側のきらら浜に集まります。そこに参加するドイツ隊のスカウトが団委員長の家に泊まることになりました。これをホームステイと言います。8日に豊中に到着して、9日にビーバー隊の隊集會に団委員長と一緒に参加してくれます」

「ええー、ドイツ人？ それで、僕たちが挨拶するの？」

「そうです。フィリップとポールという高校生です。2人が君たちに挨拶すると思います。その時に自分の名前を英語で言えるようにしましょう」

「男の人なの？」とまこと君が聞いた。

「2人とも16歳の男の子です。イケメンだよ。カッコいいスカウトだから、君たちもカッコよく挨拶をしましょう」

「すげーな。でも、できるかな」

「しっかり練習しておけば大丈夫です」

スカウトたちは、納得がいかない様子であったが、みんな一斉に書きだした。まことは、言われた通り書くことはできたけど、大声出す三先生は、ちょっと嫌だなと思った。

たかし君が、一番にテストに行った。

「ごうかくー！」

この声でお母さんたちが拍手をした。

まことは、独り言を言って練習をした。

「頑張らなくちゃ。マイネーム イズ マコト ヤマモト。アイ アム シックス イヤーズ オールド。大丈夫かな」

けいた君も合格した。

「まことー！ どうだー。まだかあ！」

大声出す三先生が、まことを呼んでいる。

まことは、勇気を出して、大声出す三先生のところへ行った。

「ワッチュアーネーム！」

まことは、何を言ってるのかさっぱりわからなかった。

藤橋副長が、後ろから説明した。

『『あなたの名前は何ですか』って言っています』

「あ、そうか。マイマイマイ、マイネーム イズ マコト ヤマモト」

「ハウオールド アーユウ！」

また、藤橋副長が説明した。

『お年はいくつですか』って言っています」

「あ、そう。アイアイ、アイ アム シックス イヤーズ オールド」

大声出す三先生が叫んだ。

「ごうかくー！ まこと君、おめでとう！」

「やったー！ やったぞ。今日の最高。お母さんに聞かせたかったなあ」

全員が合格した。時間が無くなっていた。急な下り道を急いで下りた。スカウトたちの顔には、それぞれに満足感が漂っていた。

箕面駅でセレモニーをして、電車に乗り込んだ。箕面駅から石橋駅までは座れたが、石橋駅からは立つことになった。もう席を譲るチャンスは無かった。

豊中駅に着いたら大曽公園まで歩く。解散場所は大曽公園だ。冷房が効いた電車を降りたら、ホームはむっとした暑さだった。人工広場に出ると太陽が真上からじりじりとスカウトたちを照らし、もっと暑くなった。

「暑いなあ！ 暑いわあ！ 暑い、暑い！」

また、浜嶋団委員長が、しんどそうな声を出している。

「まこと君、暑いね。あの涼しかった箕面の滝に戻りたい気分だね」

「うん」

浜嶋団委員長は、白木隊長に日陰を選んで歩くように頼んでいる。自分が暑いので、少しでも涼しく歩きたいと思っているのだ。

大曽公園に着いた時、公園の時計は15時半を指していた。そこにまことのお母さんが待っていた。

まことは、お母さんの方に駆け寄って、言った。

「お母さん、英語の挨拶ができるようになったよ。8月にドイツ人が2人来るんだって。その人に英語で挨拶するんだ」

「世界ジャンボリーだね。それは、団委員長のところに泊まる男の子だよ」

「お母さん知っているの？」

お母さんが知っていると思わなかったまことは、目を丸くした。

「団メールでずいぶん前から、連絡があったからね」

「なんだ、そうだったの」

「それで、ちゃんと話せるようになったの？」

「大声出す三先生、あ、団委員長だけどね。テストに合格したんだ」

「よかったね」

「ちょっと遊んでくる」

まことは、ブランコまで走って行った。後ろからたかし君もけいた君も走ってきた。

まこと君家族が、夕食のテーブルを囲んだ。今日も隊集会の話から始まった。

「まこと、今日は、一人で隊集会に行ってきたんだってね」

「そうだよ。お母さんもお父さんも行ったらよかったのに箕面の滝は涼しかったよ」

「そうだね。豊中は今日も暑かったわ。でも、滝はそんなに涼しかったの？」

とお母さんが言った。

「全然、涼しいよ。だって、山の中だもの」

「会社の中も涼しいけど、自然の中は涼しいだろうね」

お父さんは、羨ましそうに言った。そして続けた。

「まこと、今日はどんなことをしたの？」

「ほとんどハイキング。それで、滝でスケッチをして、広場でバツタをとって、大声競争して、英語の自己紹介をやったんだ。ああ、それと、もみじのてんぷらも食べたよ」

「いっぱいやったね。英語はどうしてやったの？」

「お父さんに言っていなかったね。次の隊集会にドイツのスカウトが参加することになっているのよ。団委員長の家ホームステイするスカウトよ」

とお母さんが説明した。

「へえー」

「僕たち、自己紹介を覚えたら、大声先生にテストを受けて合格したんだ」

「楽しくやっているね」

「うん、できたときお母さん達に拍手してもらったよ。お父さん、今度は初谷に行くんだよ。そこも、きっと涼しいよ。だって、ドイツのスカウトを連れて行ってあげるんだから」

「夏は涼しいのが一番だね。お母さん、麦茶をもう一杯入れてよ」

「はいはい。ちょっと待ってね」

お母さんは、冷蔵庫から冷たい麦茶を取りだし、お父さんのコップに満たした。

「まこと、英語の挨拶頑張ってるな」

「また、お父さん仕事なの？」

「今が一番忙しくてね。ごめん。これが済んだら、夏休みになるから」

「やったー！」

それから、お父さんの休みに遊びに行く話で盛り上がった。

第4話 初谷溪谷でドイツスカウトと遊ぶ

今日のまことは、朝から張り切っていた。

「お母さん、おはよう」と言って、得意のポーズを繰り返した。

両腕に力を入れて、何度も腰を左右に動かしている。

「そんなに頑張っていると疲れちゃうでしょ」

「大丈夫。今日は、お母さんも一緒だから。これで力が出てくるんだ」

まことは、ポーズを繰り返しながら、「頑張るぞー」と絶好調だ。

そして、「アイアム マコトヤマモト。アイアム、シックスイヤーズオールド」を繰り返した。

お母さんは、「自己紹介、頑張ってるね」とエールを送った。

集合場所は、大曾公園だ。大曾公園は、豊中第2団のホームグラウンドだ。スカウトハウスや倉庫がある栗ヶ丘会館に一番近い公園で、ボーイ隊はキャンプの後のテント干しに使用している。野球やサッカーの練習を行えるグラウンドと遊具がある幼児や小学生向けの公園が隣り合わせになっている比較的大きな公園だ。もともとは池であったところを埋め立てて造られた。

カブ隊が、栗ヶ丘会館でドイツの女子スカウトとの交流会を行う。ビーバー隊の兄弟がカブ隊にいたので、ビーバー隊は集合時間と集合場所をカブ隊と一緒にした。これで、保護者の送り迎えが楽になるからだ。それに、ドイツスカウトとの顔合わせは、駅よりも公園の方が雰囲気が良い。一つ問題があるとしたら、セミの音が煩くて話がよく聞こえないことだろう。8月9日は、夏本番だ。

まことは、わくわくしながら大曾公園に着いた。

カブ隊のリーダーとスカウトが固まって話をしている、ビーバー隊のスカウトは、ブランコで遊んでいた。

「あれー、お母さん。ドイツのスカウトいないね。どこだろう？」

「そうね。隊長もどこにいるんだろう」

そこへ、白木隊長が小走りにやってきた。

「今日は、別の場所で開会儀礼をやるよ。みんなを集めてくるね」

そう言って、ブランコの方に走って行った。

まことは、どこだろうときょろきょろと見回したけれど、見あたらなかった。

やがて、白木隊長は、スカウトとお母さんたちをいつもと違う場所に案内した。それは、木々に囲まれた小さな広場だった。野球クラブがいつも使っている場所で、浜嶋団委員長が、使わせてもらえるように頼んでいたのだ。

白木隊長の前にスカウトたちが並び、その後ろにはお母さんたちが並んだ。浜嶋団委員長と下北副長は先に左側に立っていた。

「おはようございます。今日は素晴らしいお客様をお呼びしています。昨日まで山口県のきらら浜で第23

回世界スカウトジャンボリーが開催されていました。

昨日から、ドイツ隊40名が豊中でホームステイを始めました。そして、2名のスカウトが、今日の隊集会に参加してもらえることになりました。

盛大におもてなしをして国際交流をしたいと思います。元気にやりましょう。

それでは、2人がホームステイをしている浜嶋団委員長にドイツスカウトを呼んでもらいます」

2人のドイツスカウトは、先に到着して隠れているのだ。

まことは、どきどきしてきた。

浜嶋団委員長は、白木隊長よりも大きな声で話しました。近くにいる2人に聞こえるようにしているのだ。

「フィリップとポールが、昨日、団委員長の家に泊まりました。今日一緒に来ていますが、どこかで待っています。大きな声で呼んでみましょう」

それから、急に小さな声になった。

「英語で呼んで下さい。『カモン、フィリップ カモン、ポール』です。

はい、小さな声で練習しましょう。『カモン、フィリップ カモン、ポール』

スカウトたちも小さな声で言った。

「カモン、フィリップ カモン、ポール」

「その調子です。大きな声で呼んでね。せーの」

「カモン、フィリップ！ カモン ポール！」

どこにいるかわからないけれど、スカウトたちは大きな声で叫んだ。

すると、2人がスカウトの右の方からゆっくり駆け足で出てきた。2人はにこにこしている。背が高くてカッコいい。浜嶋団委員長やリーダーが、パン、パン、パン、パンと手拍子をしている。

2人は、白木隊長の右側、スカウトの右側で止まった。

全員の視線が2人の顔に注がれた。

それから、浜嶋団委員長が言った。

「ゲーテン モルゲン フィリップ、ポール」

2人が返事をした。

「ゲーテン モルゲン」

ドイツ語でおはようという意味だ。

続けて、浜嶋団委員長は、英語と日本語で交互に話を続けた。

「レッツ グリート イーチアザー。お互いに挨拶して下さい」

「プリーズ、フィリップ アンド ポール。 フィリップとポールお願いします」

「いまから一人ずつ挨拶して回るから、ハロー、ナイス ツー ミーツ ユーって言って下さい。ハロー、ナイス ツーミーツ ユーです。それから自分の名前と年を言って下さい。練習したから言えるよね」

浜嶋団委員長は、ゆっくり言ったが、これは初めて言う挨拶の言葉だったので、スカウトは、これで調子

が狂ってしまった。

フィリップが先にポールが後ろについて、スカウトのところに近づいて行く。最初は、まことだ。

「ちょっと待ってよ、困っちゃうよ」

まことは、準備をしていたけれど、圧倒されてしまった。何を言われたかわからない。お母さんが後ろから、話してくれた。握手をしてにこにこしただけだった。英語の挨拶は、出てこなかった。フィリップに続いてポールも失敗した。

ドイツスカウトは、背の低いスカウトたちに、腰を落として顔をスカウトに合わせて言葉をかけた。

それを見て、浜嶋団委員長は、下北副長に話しかけた。

「うわっ、感動だわ。ドイツスカウトは優しいね」

「そうですね。自然に腰を落としていますね。すばらしいスカウトたちですね」

日本の指導者でも、なかなかできる人は少ないことだ。スカウトに優しく接する姿で交流の雰囲気が高まった。

あっという間に挨拶の時間が終わって、フィリップとポールが元の位置に戻ってきた。

浜嶋団委員長は、また英語と日本語で話した。

「すごい、私たちはフィリップとポールと今仲良くなりました。

今日は、ドイツから来た二人の世界の友達 フィリップとポールのためのビーバー隊国際歓迎イベントを行います。

みんなが2人とよい友だちになってください。

今日は初谷に行って愉快的時を過ごしましょう。

じゃあ、準備はできていますか。

白木隊長 行きましょう」

浜嶋団委員長は、準備してきた言葉をすべて話した。こんなに長く英語を使うことは初めだ。スカウトには、日本語で理解できた。

「レッツゴー」

白木隊長が、元気な声あげて出発した。

まことには、少し心に引っかかったことがあった。

「お母さん、僕、挨拶がうまくできなくて残念だよ」

「いいのよ。握手したから、それで十分よ」とお母さんが慰めてくれた。

全員がザックを担いで整列し、白木隊長を先頭に細い道を歩いて豊中駅に移動した。これは、浜嶋団委員長が車の通らない道を選んだルートだ。

豊中駅から電車に乗り、川西能瀬口で能勢電に乗り換えて、終点の妙見口で降りた。

妙見口は、妙見山の登り口だ。妙見山にはケーブルや車で登ることができる。登山ルートは3つぐらいあ

る。ケーブルの周りから2つのルートがある。もう一つは、初谷川沿いに登るルートだ。ビーバー隊は、初谷川の溪谷を目指している。砂防ダムの大きな広場とそこに流れ込む川がある場所だ。建物の施設はない。

だから、初谷には、トイレがない。

「ここで、全員トイレに行ってください」

白木隊長が指示を出した。

スカウトがトイレから出てくると、浜嶋団委員長が言った。

「まだ英語の自己紹介ができていないね。みんな、ここで挑戦してみようよ」

白木隊長も続けて、「さあ、挑戦してみよう」と言った。

スカウトたちは、大曽公園で英語の挨拶ができなかったことが心にひっかかっているはずだ。でも、みんなぐずぐず逃げ回っている。

浜嶋団委員長は、一人ずつ聞いて回った。

「けいた、やってみようか。できるよね」

けいた君は、しぶしぶであったが、浜嶋団委員長から背中を押されて、フィリップとポールの前に行った。

2人は、腰を降ろしてじっと待っていてくれた。けいた君の目の前に顔がある。

「マイネーム イズ ケイタ ムラタ。アイ アム セブン イヤーズ オールド」

小さい声だけど、他のスカウトにははっきり聞こえた。

「イエーイ！ けいた できたよー！ 成功です」

浜嶋団委員長は、みんなに聞こえるように大きな声で言った。それで、たかし君、けいこちゃんにも順番にチャレンジさせた。

今度はまことの番だ。

「まこと君、準備オッケイかな？」

「うん」

覚悟を決めたように、2人の前に進んだ。

「マイネーム イズ マコト ヤマモト。アイ アム シックス イヤーズ オールド」

「よし、できた！ やったね！ 大成功！」

まことは、うれしかった。他のスカウトも、明るい顔になった。

そこで、白木隊長が、出発の合図をした。

「レッツゴー！ エブリバディ」

白木隊長を先頭に、全員が一行になって、初谷に向かって歩き出した。

浜嶋団委員長も気持ちよさそうに、一番後ろから暑い日差しの下を初谷まで歩き始めた。ここから約30分の距離だ。

いつもの歩くルートとして、途中から川を渡ると川沿いに畑の端を歩く。この道は、一人でしか歩けない狭い道だ。また、元の道に出るところで山の入口になり、橋を渡り、川は右側が変わる。急にひんやりした

空気に変わった。

「うわー、涼しいわ」

お母さんたちが一番早く反応した。暑い日差しが途絶えて、山の緑にすっぽりと包まれたからだ。

「みんな、見てごらん。きれいな水だよ」と浜嶋団委員長が後ろから声をかける。

谷川の透き通った水が岩場を流れている。川の水を見ているだけで、さらに涼しくなってくる。

山道はそんなに急ではなかった。川は、道のすぐ横を流れていたが、だんだんと谷が深くなり川がどんどん下に遠のいていく。川に行く手に砂防ダムの壁が見えてきた。

「もうすぐだよ」

白木隊長が、振り向いて後ろから歩いてくるスカウトとお母さんに声をかけている。

少し急な道を登り切ると、右手に砂利が広がった広場が現れた。明るくて眩しくなった。河原がすべて砂利で覆われている。水が流れているところが見つからない。ダムの手前に小さな水たまりがあるだけだ。もう、いくつかのグループが砂利の上にテントを張って周りで人が動いていた。ビーバー隊のテントは、広場の奥の方にあった。近づいていくと、テントの奥に川の流れが見えた。子供や大人が川に入って遊んでいた。その手前で水が砂利に吸い込まれていく。

「隊長、気持ち良さそうだね。ここで遊びたいよ」

まことが言うと、「そうだよ。ここで遊ぶんだよ」

「やったー」

スカウトやお母さんたちは、涼しい自然に圧倒されているようだ。

フィリップとポールもにこにこして、2人の顔に期待どりの満足感があふれていた。

そこに、先に準備していた藤橋副長が迎えにきた。他にも下北団委員や吉川団委員がいた。

藤橋副長に付いていくと、2団のテントには、全員座れる食卓テーブルができていた。

「すごいなあ。こんなにっばなテーブルができています」

すべて、先発リーダーが準備したものだ。山の斜面には、簡易トイレも用意されている。

やがて、開会セレモニーが始まった。

白木隊長が初めに英語と日本語で挨拶した。

「おはようございます。初谷は涼しいですね。」

フィリップとポールと一緒に遊んで楽しみましょう」

まことは、もちろん日本語しか聞いてない。

次に、浜嶋団委員長の挨拶だ。

「フィリップとポール、豊中市の近くにも自然があります。」

2団では、ビーバー隊、カブ隊、ボーイ隊、ベンチャー隊がここを利用します。日本の自然を楽しんで下さい。

お昼は、君たちの歓迎昼食会を行います」

フィリップとポールに伝えないといけないから、英語で話すこともしかたがないのだ。

セレモニーが終わると王様じゃんけんをすることになった。

お昼まで1時間ある。その間にフィリップとポールのために日本用とドイツ人向けの特別料理を用意することになっている。各自はおにぎり持参だが、全員で食べるようにしている。

浜嶋団委員長が前に出てきた。王様じゃんけんは、浜嶋団委員長が考えたゲームで、集会でときどき遊んでいる。

まことは、初めてだ。それを英語でやることになった。

ちょっと離れたところにキャンプ用の赤い折りたたみ椅子が置いてある。

「しまった！ 王冠を忘れてきた」

浜嶋団委員長は悔しがった。王様になると王冠を被って椅子に座る。その王冠を忘れてしまったのだ。まことは、その王冠がどんなものか分からないが、がっかりだ。

「じゃあ、並ぶ順番を決めるね。王様は、スカウトからやってもらいます。ひとみちゃんが最初の王様で、けいこちゃん、まこと君、けいた君、たかし君の順に並びます。次は、フィリップとポールの順、後は適当にぐるっと円になってください」

丸く並ぶ人は立ったままで、王様だけが椅子に座れる。椅子は、立っている人とはかなり離れている。王様は偉い人ということだ。王様に挑戦するときだけ挨拶が必要だ。礼儀正しい振る舞いをゲームで養うことを目的としている。

「昨日の夜に、王様じゃんけんの英語版について2人に説明しました。英語は、みんなすぐできないから、私が横で教えますので、そのとおりに話して下さい。

では、始めましょう。やればわかります。

後ろにいる吉川団委員長さんから始めて下さい」

吉川団委員長がやっているのを見ていると、初めてのまことやひとみちゃん、お母さんたちにもすぐにわかった。

「最初はグー。じゃんけんほい！ あいこでしょー！」

この掛け声が響いて、じゃんけんが進んでいく。まことは、勝ち進んできたたかし君に勝って、続いてけいこちゃんにも勝った。すぐにひとみちゃんの王様と英語じゃんけんをすることになった。

浜嶋団委員長が、まこととひとみちゃんに英語を教えてくれる。

「まず、お辞儀をしてください」

まことは、軽く頭を下げてから、浜嶋団委員長が言う英語をもごもご言った。ひとみちゃんと交互にもごもご言ってから、じゃんけんになった。

「最初はぐー。じゃんけんほい！ あれー、負けてしまった」

残念。まことは、またもごもごと英語を言った。ひとみちゃんは、ガッツポーズをしていた。

「悔しい！」

みんなが笑顔で見ている。

それから、振り出しから始めることになる。

2人に連続で勝って、少し進んだ。

フィリップの番だ。フィリップは、勝ち進んで王様と対戦することになった。

浜嶋団委員長が、おじぎをして下さいと言うと、腰を低くして外国の王様に挨拶するように左足を前で立てて、右膝を地面に付けた。

「カッコいいな。外国の騎士のようだ」

しかし、王様に負けてしまった。そのあと、まこととも1回じゃんけんをした。

しばらく遊んだ後で、藤橋副長が、もう準備ができたと言ってきた。

全員がパーティをする場所に戻ると、食卓テーブルと離れた小さなテーブルに料理がまとめて置いてあった。浜嶋団委員長が、カメラを取り出して写真を撮っていた。

まことも覗きに行った。

「すごい、おいしそう。いっぱいあるよ！」

みんなも近づいてごちそうを見た。ソーセージ、唐揚げ、冷やしうどん、それに大きな桶にチラシ寿司がいっぱいある。デザートのフルーツポンチもある。

すごく豪勢だ。リーダーたちが、頑張ったのだ。テーブルには、クロスが掛けてあるし、楽しい雰囲気になった。

「これは、僕たちも食べていいの？」

けいた君が、みんなの聞きたいことを聞いた。

「たくさんあるから、みんなにも食べてもらうからね」

藤橋副長が言った。

まことは安心した。

「よし、いっぱい食べるぞ」

いよいよ昼食会が始まる。歓迎パーティだから、また、浜嶋団委員長が代表して英語でフィリップとポールに挨拶をした。

まこと君は、「今日は、英語ばかりだ。やっと思えられるよ。うれしいな」と挨拶が終わるのを喜んだ。

最初は、遠慮気味だったスカウトは、フィリップとポールが取り終わるとみんなが料理のテーブルに集まった。

全員が、自分の弁当よりも、特別料理を優先して食べた。

スカウトたちは、早く川遊びをしたくてしかたがなかった。

白木隊長が、川遊びの指示をだした。

「じゃあ今度は、川遊びをします」

「やったー！」

みんなが声を上げた。

「川遊び用の靴に履き替えてください」

今度は、下北副長が声をかけた。

砂利の上を流れている川の深さは、10cmぐらいだった。川底の砂利の中に水が潜ってしまう。上流の狭い本来の川になっているところは、子どもの腰ぐらいになる深いところがあった。水は透き通っていて冷たい。

フィリップとポールは、砂利の上に横たわっている大きな枯れ木の上に腰かけて話をしている。足は水の中につけているから涼しいはずだ。ここら辺りは、大きな木の枝が空を覆っているので日陰になっている。ダムに近いところは、木陰が無いので暑い。

「沢ガニがいるぞ」

誰かが言った。

スカウトたちは、水に浸かりながら川底を探した。小さな沢ガニが見つかった。フィリップとポールと関係なく、スカウトたちで遊ぶ方が断然面白い。とても2人にかまってはられない。

しばらくすると浜嶋団委員長がプラスチックの水鉄砲を持ってきた。水タンクが付いている。しかし、スカウトたちは、他の人たちが一緒に水に入っているので、水の掛けっこはだめだと言われた。

「団委員長、それでもいいよ。水鉄砲を貸して下さい。けいたとまことの分もお願いします」

とたけし君がにたにたしながら、水鉄砲を受け取った。

たけし君は、2人に水鉄砲を渡して、なにやら話をした。2人はちょっと驚いてから、おもしろいなあという顔をした。

「よし、やるぞ。水を入れよう」

浜嶋団委員長は、スカウトが何をやるのだろうと見ていた。

3人は、フィリップとポールの後ろに回り込んで行った。

「それー！」

「それー！」

と水鉄砲からフィリップとポールの背中に水が発射された。

「オー、マイガッド！」

2人は立ちあがって振り向いた。

「逃げろ！」

と言いながらも、後ろ向きに水を発射した。

腰かけている木が邪魔して、2人は動けない。

「ハハハハ！」笑いながら離れた。

フィリップとポールは、笑ったまま追いかけていなかった。そして、また前を向いて話を始めた。

たけし君は「やったね」と言いながら、指を1本立てた。けいた君とまことは、「うん、うん」と顔を振った。それから、3人とも笑いをこらえながら前進している。静かにフィリップとポールに近づいているつもりだけれど、「じゃりっ、じゃりっ」という音は消せなかった。2メートルの距離まで近づいた。

突然、フィリップとポールが振り返って腕を上げて熊が立ったような格好をして「ワオー」と大きな声を出した。

3人は、びっくりして「アー！」と声を出した。まことは、後ずさりしたときにお尻をついてしまった。「まこと、早く逃げろ！」

「ハハハハ！」とフィリップとポールが笑っている。

浜嶋団委員長も「まこと、早く逃げろ！」と声を出してから、笑った。

とんだ結果になってしまったが、スカウトたちは楽しんだ。

スカウトたちは、もっと遊びたかったが、お母さんの所に行って、足を拭いてもらい、普通の靴を履いた。

フィリップとポールも制服をTシャツの上から来ていた。ドイツの制服は上だけで、下は自由だ。

白木隊長が、集合をかけた。終わりのセレモニーは、最初から丸く並ぶことになっている。

そこで、スカウトたちはお母さんからプレゼントを受け取って、順番にフィリップとポールに渡し始めた。お母さんたちが相談して準備していたのだ。

「まこと、これを渡して」

とお母さんが、まことに小振りの扇子を渡した。日本文化のグッズだった。

まことは知らなかったけれど、お母さんから扇子を2つ受け取って2人に渡した。

「プレゼントです」と緊張して日本語で言った。

「サンキュー」とポールが言うのが分かった。そして、握手をした。ポールがにっこりほほ笑みかけてきて恥ずかしかった。

浜嶋団委員長は、スカウトたちがプレゼントをすることを知らなかった。

「みんなも準備してくれたんだ。ありがとう」

浜嶋団委員長からは、団からのプレゼントを2人に渡すことにした。

全員に英語で説明した。

「実は、私からも豊中第2団からあなた方に3つのプレゼントがあります。

1つは、2団の2009年の60周年記念のチーフリングです。

2つ目は、2団のネッカチーフにつけるワッペンです。フェニックス、不死鳥が2団の数字2の上に乗っています。これは、私たちの名誉の印です。

私たちは、いつもボーイスカウトです。

そしていつまでもボーイスカウトを続けます。

それは、私たちが死んだ後もスカウトでありたいからです。

最後は、日本連盟のワッペンで、世界スカウトジャンボリーを成功させるためのものです。

世界ジャンボリーは、大成功しました。

それは、あなた方や多くの国、多くのスカウトや協力していただいた人々のお陰でした。

私はもう一度言います。ありがとう」

今度の話も長かったけど、まことやお母さんたちは、この説明で2団のワッペンの意味が初めてわかったようだ。

フィリップとポールは、お礼を言ったが、お返しを持ってこなかったことを残念がった。浜嶋団委員長も予期できなかったプレゼントだったので、2人に相談していなかったからだ。

あつという間の国際交流だった。

まことは、初谷は、ほんとうに涼しかった。川遊びができて最高に楽しかった。外国人との交流も楽しかった。もっと英語が話せるようになったら楽しいだろうなといろいろ考えた。

お父さんは、「暑い暑い」と言いながら玄関から部屋に入ってきた。

「お父さん、団委員長みたいだね」

「どういうこと？」

「団委員長が、今日も豊中駅からそう言いながら歩いていたの」

「そうか。本当に暑いよ。団委員長はどんなふうに言っていた？」

「お父さんよりおおげさなんだ。暑いなあ、暑いなあ、ああ、暑い、暑いって」

まことは、頭を上下に動かして、浜嶋団委員長の真似をして見せた。

「それ、ちょっとやりすぎじゃないのか」

「うん、やりすぎ。はははは」

とまことは、大きな声で笑った。そして、お母さんの方を見て言った。

「お母さん、初谷涼しかったよね」

「そうだったね。簡単に行けるところでよかったわ。あんなに涼しいって思わなかったわ」

「そうだったの。君たちはいいところばかり行ってるね」

まことは、初谷を思い出しながら言った。

「お父さんが一緒に来ないからいけないんだよ。ああ、あそこでキャンプしたら涼しいなあ」

まことは、さらに力を入れてお父さんに話した。

「お父さん、僕、ドイツ人と挨拶ができたよ」

「それはよかったね。自信ができただろう」

「なにしろ、ドイツ人だよ。フィリップとポールだよ」

「それで、まことは、英語を勉強したくなったかい？」

「うん、少しそんな気持ちになった。箕面の滝で練習したからできたよ」

お母さんは、ボーイスカウトに入ってよかったと思いながらお父さんに言った。

「お父さん、隊長たちが、よく考えてくれているのよ。よかったわ」

「本当は、団委員長が僕たちに挨拶のやり直しをさせてくれたからだよ」

まことは、妙見口駅でのことを正直にお父さんに話した。

「やっぱり、ボーイスカウトはよかったね」

第5話 新たな挑戦、朝の挨拶はグッモーニン

9月の初めに上進式と夏の報告会があった。そこで、浜嶋団委員長は、団の新しい方針を発表したことで張り切っている。そのため、隊長たちはなぜか新しい気持でプログラムを始めるようだ。

まことは、今日もまた30分早く起きた。

「おはよう」

台所にいるお母さんに声をかけた。

「おはよう。今日も絶好調かしら」と言ってまこと君を見た。

すると、まことが両腕に力を入れて、腰を左右に動かした。動きが決まっていた。

「こんな感じだよ」

お母さんは、もう腰の動かし方でまことの気持がよくわかるようになった。

「やっぱり、絶好調ね」

まこととお母さんは、自転車に乗って緑地公園に出かけた。緑橋から公園に入ったら、グルメハンターのときを思い出した。そして、その時よりも、うきうきした気分になっていた。

「お母さん、体力測定って何をするのかな？」

「メールには詳しいことは書いてないの。きっと楽しみは本番のお楽しみってことじゃないかな」

お母さんは、何となく想像ができているが、まことには言わないことにした。

「だからわからないってことか。教えてくれればいいのにね」

「そういうふうな楽しみにしてくれることを考えているんだわ。知っていたらつまらないでしょ」

「よくわからないけど、そんなものかな」

と言いながら、まことは、心の中ではどんなことでも頑張ろうと思っていた。

「そういうことよ。今日も頑張ってるね」

「うん。頑張る」

まことがレストハウスに近づくと、白木隊長と浜嶋団委員長が待っているのが見えた。他のリーダーはいない。どういうことだろうか。まことは、これはなにかありそうだと思った。

白木隊長が、迎えに出てきた。

「グッドモーニング！」

何？ えっ！ まことは、何も言えないままじっと固まってしまった。

「まこと君、グッドモーニング・・・言えない？ おはよう」

「おはよう」

まことは、小さな声で返事をした。そして、「ああ、おはようという英語だった。急に言われても困るわ」と思った。

「はい、自転車をあそこに置いてきてね。後で一緒に移動するから」

まことは、お母さんを見ながら、「言えなかったよ。しょうがないか。頑張らないといけないな」と言った。

次に、ひとみちゃんがきた。

「グッドモーニング！」

また、白木隊長がひとみちゃんに向かって言った。やっぱり、返事はでなかった。

けいた君がやってきた。

「グッドモーニング！」

「グッドモーニング」

けいた君は、目を左右に動かして戸惑いながらも小さな声で言った。

「けいた君、言えたね！」

白木隊長は、うれしそうに声を出した。一緒に来たお母さんも満足した顔だった。浜嶋団委員長も「おっ、いいね！」とけいた君を誉めた。

その後、けいこちゃんと言えなかったけど、たかし君が言えた。2年生のビッグビーバーは英語で返事ができたが、1年生は全滅だった。

この英語の挨拶は、今日から始まったのだ。

まことは、これを見ていて、悔しい気持になった。でも、本当のところは恥ずかしい気持もある。

白木隊長は、浜嶋団委員長とこのことで何かひそひそと話し合っている。

スカウトが全員揃ったので、白木隊長がスカウトだけを集めて丸くなるように指示した。お母さんたちもその周りで何をするのかなと思いつつ見ている。そして、腰を下ろさせて、まじめな顔をしてスカウトたちに話し始めた。

「さすが2年生だね。グッドモーニングの返事ができたね。今日から英語を少しずつ使うことにしました。報告会で団委員長が、『英語を使う団にします』って言っていたよね。覚えているかな」

「覚えていない」

「覚えていないよ」

「ええー！、覚えていないの。しかたがないなあ。それでは、みんなと作戦会議をします」

スカウトたちは、作戦と聞こえたので興味を持った。みんな真剣な顔になっていた。

「今、他のリーダーが原っぱの下で準備をしています。」

開会セレモニーで、隊長が『グッドモーニング』と言うから、そのときにみんなも大きな声で『グッドモーニング』と言ってほしいのです。これは、スカウトと隊長だけの『グッドモーニング作戦』だよ。いいですか。だから、ここで練習をします」

ここで、けいこちゃんが聞いた。

「どうして練習をするの？」

「いいことを聞いてくれたね。理由が分かったらみんなで力をだせるものね。

その理由は一回で大きな声を出してほしいからです。1回目にできることがスマートです。さっき、グッドモーニングを言えなかったスカウトがいたよね。今度はできるかな。できないかもしれないね。できるとカッコいいからです。できると気持ちいいからです。

みんなが、最初から大きな声を出せたら気持ちいいでしょ。

気持ちがいい挨拶ができれば、一日が気持ちよくなるでしょ。

だから、練習して最初から大きな声で挨拶できるようにしよう。

今日は英語でグッドモーニングだよ。けいこちゃん、わかった？」

「わかったわ」

「隊長、ぼくもわかったよ」とまことは、なんとか頑張ろうと声を出した。

「おお、まこと君も頑張ってるね。ひとみちゃんも頑張ってるね。みんなで頑張ろう」

他のスカウトもわかったようだ。みんなやる気のある顔をしていた。

「じゃあ、『グッドモーニング作戦』の開始だ」

スカウトたちは、何か特別なことをやるような不思議な気持ちになって、わくわくしている。

「じゃあ、立ってください」

全員が立って、白木隊長の方を見るのを確認してから言った。

「グッドモーニング！」

「グッドモーニング」

スカウトが繰り返したが、ちょっと力が無い。

「はい、みんな言えたね。でも、もっと大きな声で言ってみよう」

「グッドモーニング！」

「グッドモーニング！」

白木隊長は、更に繰り返した。

「もう一回、もっと大きく言ってみよう」

「グッドモーニング！」

「グッドモーニング！！」

このとき、まことは、大きな声を出すことができた。

白木隊長はにこっと笑ってから言った。

「オッケー。いいよ。この声で挨拶しようね。『グッドモーニング作戦』で、お母さんやリーダーたちをびっくりさせよう」

横で聞いていた浜嶋団委員長が言った。

「みんな、大丈夫だ。作戦を成功させようね。頑張ろう！」

まことは、もう一度「グッドモーニング」と声を出した。

「そうだよ。まこと君、練習が大事だね」

浜嶋団委員長がこう言うと、他のスカウトも、「グッドモーニング」を連発した。

お母さんたちは、それを見て互いに顔を見合わせて笑顔になった。

スカウトとお母さんたちは、白木隊長の後について、谷あいの原っぱを下りて行く。スカウトたちは、途中で白木隊長を追い抜いて、速足で進んでいく。浜嶋団委員長は、お母さんたちと話をしながら白木隊長の後ろを歩いて行った。

「どうですか、お母さんたち。英語を使う団にしたいのですが。こんな感じで簡単な言葉でも、隊集会で英語を話すきっかけを作っていきたいのです」

「今の子供たちはいいわね。私たちの子どもころは、こんなふうにはいかなかったわ」

「英語を使ってくれたらうれしいわね。ぜひやってください」

浜嶋団委員長は、お母さんの賛同の言葉を聞いて、自分の思いを説明した。

「私は、ビーバースカウトからすべての隊で始めたいのです。ベンチャー隊になったら海外派遣のプログラムに参加できるのです。でも、参加したスカウトからもっと英語ができれば良かったっていう感想を聞いています。だから、このスカウトたちが大きくなったら、英語をペラペラに話せるような取り組みをしたいのです」

「いまからやるといいですね」

「私は、英語は下手だけど、環境を作ることで頑張ります。若い指導者は結構英語を話せますよ。みなさんも話せるんじゃないですか」

「そんなことはないですが、子どものために応援はしますので、よろしくお願いします」

「簡単な言葉ですから、みんなで頑張ってくれたら、うまくいきますよ。これから楽しくなりますよ」

これで、お母さんたちは、浜嶋団委員長が英語を本気でやることが分かって、これは面白くなりそうだと互いに顔を見合わせた。

原っぱの下には、備え付けの大きなピクニック用のテーブルが2つ離れて設置されていた。テーブルの四方は、3人が座れる板状の椅子が一体になっている。スカウトたちは、ザックを椅子の上に置いた。椅子の上は、ザックでいっぱいになった。

「集合！」

白木隊長は、副長たちに開会儀礼の準備ができているのを確認してから声を発した。

「じゃあ、隣の人と手をつないでください。ビーバーコールをします」

この歌は、毎回やっているけど、まだ全員が大きな声で歌えるまでになっていない。

「みんなで 大きな わを つくろう
みんなで 大きな わを つくろう
大きくできたら きれいにできたら
みんなで あそびましょう
ビーバー！ ビーバー、ビーバー、ビーバー！」
全員が敬礼をした。

さあ、白木隊長の「グッドモーニング作戦」だ。いつもより大きな声で言った。

「グッドモーニング！」

「グッドモーニング！！」

リーダーたちから「オー！」という歓声が出た。一瞬のことに全員が感動した。

スカウトたちは、大きな声を出すことができた。それに、お母さんたちも含めて全体が大きな声で挨拶ができた。

「大きな声でグッドモーニングが言えました。

サンキュー。とてもいいです。今日から、少しずつ英語を使うことにします。今日は、サンキューも使ってみましょう」

グッドモーニングは、毎回の挨拶で使う。他にも今日の英語の言葉として選ばれたのが「サンキュー」だ。

いつものように、隊旗に敬礼した。

「スカウトサインは、たけし君お願いします」

たけし君は、気持ちよく言った。

「これで、開会儀礼を終わります」

「体力測定、集合！」

白木隊長は、別のところに移動したあとに声を出した。

「あ、集合だ。さあ、あっちまで走れー！」

「うおーー！」

スカウトたちは、30mぐらい離れた草地を目指して、声を出しながら走っていった。

全員が集合してから、白木隊長が言った。

「早く集合できたね。それでは、最初の体力測定は、走り幅跳びです」

「どんなやりかた？」

とまことが真っ先に聞いた。

「わからないかな？ ちょっと下北リーダーに見本をやらしてもらおう。下北リーダー見本をお願いします」

「はい。よっし、見ててね」

下北副長は、スタートラインからゆっくり走りだし、ロープがある所で踏みきってふわっと跳んだ。

「それー！」

「わかったかな。あそこで大きくジャンプするんだよ。あとで、あのロープから跳んだところまでの距離を計ります」

白木隊長は続けて言った。

「最初はだれかな。ビッグビーバーからやってもらおうか」

「はい、やります」

けいた君が手を上げた。

「よし、けいた君。頑張ろう。」

ここにきて、ここから走って下さい。いくよ。はい、スタート！」

けいた君は、走り出した。ロープのところで跳んだような感じだったが、あまり走るときと変わりはなかった。

「なんか跳び方がわからん」

そう言って、けいた君は、頭を左右に振りながら距離を計るところを見ていた。

「難しいかな？」

白木隊長は、残りのスカウトに聞いた。みんなは、それもわからないような顔をしている。それから、他のスカウトも次々と跳んだが、どうもうまくできなかった。

「難しかったね。立ち幅跳びがよかったかな。もう一回やって下さい」

2回目も、うまく跳べなかった。

全員の測定が終わったときに、記録係をやっていた浜嶋団委員長が、スカウトを表彰しようと言いだした。

「どうして？」

スカウトたちは、表彰されるほど跳んでいないと思った。

浜嶋団委員長の表彰の説明はこうだった。

「スカウト全員がよく頑張ったからです。」

それに、みんなは、9月の報告会の『かっこつけま賞』をもらったときに、きちんと表彰の姿勢ができなかったよね。だから、今日は祝声のやり方をしっかり覚えよう。何回もやるからできるようにしていきましょう」

「白木隊長の合図でリーダーとお母さんが、『おめでとう、ビーバー、ビーバー、ビーバー！』って言います。その時に君たちは敬礼して下さい。『ビーバー！』と言われた後で、『ありがとう、ビーバー！』って返します。このとき、右足と右腕を後ろに引いてから前に腕を上げて下さい」

スカウトには、足と腕との関係がややこしかった。敬礼のときにまっすぐ立たずに、右足を後ろに下げてしまうスカウトもいた。

「これからの競技で毎回するから、本番をしましょう」

ビッグビーバーは、なんとかできていたが、1年生たちは、自信がなさそうなようすだ。

まことは、言っていることはわかるけど、動作がついていけるか不安だった。

白木隊長が音頭をとった。

「はい、みんなは敬礼だよ。走り幅跳び、おめでとう！」

「ビーバー、ビーバー、ビーバー！」

「ありがとう。ビーバー！」

ここで、リーダーが拍手をした。まだ、うまくできないところがあるが、次の競技で修正していく考えだ。

次は、垂直跳びだ。下北副長が前に出てきた。

「はい、つぎは、あそこを見て下さい。街灯があるでしょ。あそこで垂直跳びをやります。街灯で集合！ 走れー！」

全員が駆け足で移動した。

原っぱの端に街灯のポールが立っている。そこに新聞紙が貼ってある。下に置いてあるバケツの水に手につけて、跳びあがって一番高いところで新聞紙を叩く。

「ちょっとやってみるよ。こんな感じです」

下北副長が、手に水を付けて、それを立ったまま新聞紙に印を付ける。

「はい、もう一度水をつけます。そして、えい！」

跳び上がって、新聞紙にタッチした。

「おお！」とスカウトが声を出した。

「これで、印のところを計測します」

水で濡れたところどうしを計ると跳んだ高さがわかるということだ。メジャーを使って図る格好をした。

「なかなか難しそうだ。うまくタッチできるかな」とまことは独り言を言った。

他のスカウトたちも、初めてするので不安顔だ。

「さあ、やってみよう！」

足元は、ポールの周りにコンクリートの土台があり、スカウトの足がちょうど入る程度である。跳び上がることと街灯にタッチすることが難しそうだ。これも思い切って跳ぶことができなかった。全員が跳び終わってから、ひとみちゃんのお母さんが前にでてきた。

「わたしもやってみようかな」

「おっ、お母さん、すごいぞ。どれだけ跳べるかな」

浜嶋団委員長が、盛り上げた。

背が高く細い体なのでいっぱい跳びそうさだ。2回跳んだ。やっぱりスカウトたちの2倍は跳び上がった。お母さんは、満足した顔をしていた。下北副長が他のお母さんたちにも声をかけたが、やろうというお母さんはいなかった。

この後も「ありがとう、ビーバー！」の祝声を練習した。

「少しくまできましたね」

浜嶋団委員長は、スカウトを誉めたけれど、スカウトには違いがよくわからなかったようだ。

次は、測定ではなくゲームだ。

「親子で新聞紙タワーづくりー！」

下北副長が大声で叫んだ。リーダーたちが「イエーイ」と声をあげている。

お母さんと2人でタワーを作る。新聞紙とテープだけだ。

「どうやって作ればいいのかは、自由に考えてください。5分間で最後に一番高いチームが勝ちです。全員、ブルーシートの上に乗って下さい」

「ふわふわだよ。それに平らじゃないよ」

「ええー、どうやって立てるの？」

みんな口に出しながら考えている。

「親子で考えましょう」

下北副長からそう言われても、どうしたらいいかわからない。

「開始！」の音が響いた。

まこと君親子は、新聞紙を丸めて真ん中を伸ばしていく作戦にした。問題は、タワーが倒れやすいことだ。お母さんが、テープで土台をブルーシートにくっつけた。

「お母さん、かしこいね。倒れにくいわ」

「なんでもありだからね」

「新聞紙が横向きだから、なかなか高くないよ」

「少しずつ中に入れてテープでくっつけて上げていくの」

「新聞紙が動くからテープがつきにくいよ」

「残り、2分でーす！」

下北副長が叫んだ。

「みんな頑張ってー！ いい勝負だ。頑張れー！」

今度は、浜嶋団委員長が応援した。

「まこと、急いで！」

「お母さん、負けているよ」

「我慢、我慢、5段ぐらいに伸ばそうよ」

「早くやってね」

まことは、けいた君にもひとみちゃんにも負けている。スカウトよりもお母さんたちが頑張っている様子がおもしろい。まことのお母さんは、もう1段伸ばした。あと1段で勝てそう。

でも、1段伸ばせたけど、他の親子のタワーも伸びたので結局3番になった。

「お母さん、残念だけど、おもしろかったわ」

親子のゲームでは、体力測定と違って全力をだすことができた。親子の絆も深まったようだ。

次のゲームを始める前に藤橋副長が、スカウトたちに興味深い話をした。

「それでは、キムスゲームをします。

その前にちょっとお話をします。

はい、ボーイスカウトを作った人を知っていますか？ イギリスの人です。

ベーデンパウエルと言います。この名前は覚えておいて下さい。私たちは、BPと呼んでいます。ベーデンのBとパウエルのPで、BPです。BP。わかりますか？ 覚ええましたか？

その人が書いた有名な本があります。『スカウティング・フォア・ボーイズ』と言います。その中にキム少年がでてきます。キム少年は、君たちより3つぐらい上と思って下さい。キム少年はイギリスの情報部員から訓練を受けました」

「情報部員ってなに？」

たかし君が聞いた。

「あ、わからないね。情報部員っていうのはね。スパイみたいなことかな」

「スパイって何？」

「ごめん、ごめん。なんどもごめん。情報部員はねえ、難しいね。イギリスのお役人で、インドに来ていたんだね。それで、インドのいろいろなことを調査して、イギリスの本部に報告する人っていうことかな。これでなんとなくわかるかな。秘密で調べることが多いと思う。どうですか」

「なんとかね」

「よかった。いまは、それぐらいにしておいてね。それでね、その情報部員は、物を売る商人もやっていた。商人として、秘密に調べているからね。その商人の情報部員が、キム少年が賢いことに気付いてイギリスに役に立つと思って教えたのさ。商人が持っていたたくさんの宝石を1分間見ただけで、全部覚えられるように訓練します。キム少年は、短い時間で記憶する力を身につけました。それからたくさんの活躍をすることができました。それで君たちもキム少年と同じようなことをします。これをキム少年の名前から、キムスゲームと呼びます。

1分間で、何があるかを覚えて、リーダーに報告して下さい。たくさん覚えられた人が勝ちです。何か質問はありますか」

「なんだか難しいよ」

「覚えるのは簡単だけど、たくさんあると困るなあ」

「これは、1人ずつでやるの」

スカウトたちは、いろいろなことを口に出した。

藤橋副長は、これに返事をした。

「そうだよ。1人でやって下さいね」

それから、スカウトたちは前の方に置かれたレジャーシートで覆ってある場所へ移動した。

「このレジャーシートを取ると、宝石ではありません。もっと分かりやすいものが10個以上あります。これを1分間で覚えて下さい」

そう言うと、藤橋副長は、レジャーシートの端を持って、それを外した。

「始めー！」

いっぱい現れた。簡単なものばかりだ。ノート、傘、はさみ、ハンカチ、ロープ、筆記用具、レインコート、バインダー……。確かに簡単だけど、新しい名前をどんどん覚えていかないといけない。あっという間に1分間が過ぎた。

「終了ー！」

まことは、下北副長に覚えた物を言った。10個まで言えたが、まだ2つ残っているとされた。

「あーん、思い出せないよー」

全体では、11個当てたたけし君が一番だった。

「もう一度やろうよー！」

けいこちゃんが藤橋副長に頼んだ。けいこちゃんはまだあと3つ足らなかった。

「ええー、やりたいの。今度は全部言えるかな？」

「言えるよ」

「じゃあ、今度は30秒で全部当てて下さい。」

もう一度やることになった。

「ようし、頑張るぞ！」

「全部当てるぞ！」

スカウトは自信いっぱい目を見開いた。

30秒もあっという間に終了した。

結果は、全部言えたスカウトはいなかった。

「あーん、だめだったー！」

「残念だったね。はい、よくできたから表彰します。整列して下さい」

スカウトたちはやり遂げた顔をしていた。今回は、前よりも「ありがとう、ビーバー！」が大きな声で言えたので誉められた。ただ、「ビーバー！」と言う時の腕の動作も全員揃っていたが、残念なことに、ひとみちゃんは、左腕を上げていた。

最後の体力測定は、ボール投げだった。スカウトたちは、リーダーが思ったほどにうまくボールを投げるができなかった。

「上に投げたら遠くに飛ぶよ。見ててね」

たまりかねて、記録係の浜嶋団委員長が実際にボールを投げてスカウトに教えた。

それで、2回目で上に投げたら全員が前よりも3m以上遠くに飛んだ。これで、スカウトはうれしい顔に

変わった。

これで体力測定は終わりだ。

まことは、できないことが多かったけど、チャレンジしてよかったと思った。

リーダーの片付けが終わって、閉会儀礼になった。

「それでは、丸く集まって下さい」

表彰から始まった。

白木隊長は、各スカウトの前に移動しながら一人ずつ木葉章を渡していった。体力測定表も渡された。

まことは、この体力測定表を大事にしまっておこうと思った。

全員に渡し終わると、隊長挨拶を続けた。

「今日の『グッドモーニング作戦』は、うまくできたね。これからもいろいろな作戦を成功させましょう。それから、祝声がうまくなったね。もう、団行事でやっても隊長は自信満々です。この2つがよかったことです。これからも頑張ろう。ビーバー！」

次の浜嶋団委員長挨拶は、夏のプログラムを思い出させた。

「隊長が、今日はサンキューを使ってみようと言ったけど、言うチャンスが無かったですね。それで、あのドイツスカウトのポールから預かっているワッペンを君たちに渡します。

これです。ドイツ隊のワッペンです。これはね、スカウトたちが初谷でドイツスカウトにプレゼントを渡したでしょ。そのときに、お返しのプレゼントを持っていなかったのだから、家に帰ってから、ポールからワッペンをスカウトに渡してほしいと言われて預かっていたんだ。

これを受け取る時に『サンキュー』と言ってみましょう」

浜嶋団委員長は、たかし君の前に行った。

「ディス イズ フォーユー。 あなたに差し上げます」

「サンキュー」

「ユアー ウェルカム。 どういたしまして」

一人ずつ、渡して回った。

まことは、ワッペンを貰った時に、あの涼しい初谷のことを思い出した。

「団委員長、フィリップとポールはあれからどうしているの？」

「それがね、写真を送ってあげたんだけど、何も返事が来ないんだ。忘れちゃったのかな」

こうして、白木隊長も浜嶋団委員長も本気で英語を使う計画を進めようとしていた。

閉会のセレモニーが終わってから、荷物が置いてあるテーブルの前で、お母さんたちが英語の話で盛り上がっていた。まことは、この話は気になって下北副長にももらったお菓子を食べながら聞いていた。

「お母さん方、今日は英語を使ってみましたけど、どうでした？」

浜嶋団委員長が、お母さんたちに聞いている。

「いいですね。羨ましいわ」

「よかった。毎回やることにしていますから、ご協力をお願いします」

「はい。けいこは、3歳のときに英語を習っていたんです。でも、英語教室を止めたらすっかり忘れてしま
って。でも、これで思い出すかもしれません」

「子供は吸収力が強いですから、やってもらったらいいと思います」

浜嶋団委員長は、保護者たちの言葉に力をもらって、自分のことも言いだした。

「私なんか、ジャンボリーのためにラジオ英会話を2年前からやっていますが、朝覚えても夕方になつた
ら全部忘れてしまいます。辞書を引いて挨拶を作りますけど、スカウトが言っていることはわかりません。
でも、私が先頭に立って英語を使えば、みんながやってくれると思っています」

「今日は恥ずかしがっていましたが、慣れてきますよ。団委員長、頑張ってください」

こんな会話で盛り上がってきた。

「子供自身が、英語が好きになってくれるようにします。お母さんも無理強いしないようにお願いします」

「それがいけないですね。子供が嫌いになってしまわないようにします」

「これからスカウトが増えて、みんなが英語を話しながら活動するときにきっとやってくると思います。一
番小さなビーバー隊から始めれば、全員ができるようになります。お母さんたちの協力があれば実現するの
は簡単ですよ」

それから浜嶋団委員長は、吉川団委員と一緒に帰ることにした。

ここで、スカウトたちは、浜嶋団委員長に「シー ユー。グッバイ」と大きな声で言ってきた。

「おー、びっくり。知っているじゃん。みんなー、シー ユー、 アゲイン」

スカウトたちは、英語を勉強したことがある。英語を使う場が無いから忘れてしまう。ボーイスカウトで
は、特に英語を教えることは必要がない。知っている英語を単語でも短い言葉でもいつでも使用できる環境
を作ればいい。浜嶋団委員長は、このスカウトの言葉を聞いて、それで間違いがないと確信した。

白木隊長と浜嶋団委員長は、これは楽しい雰囲気になってきたぞと期待が大きく膨らんできた。

まことは、帰り道でお母さんに話しかけた。

「お母さん、今日は英語の挨拶できななかったけど、今度は言えるようにするよ」

「そうだね。家でも言うてみる？」

「ええ？ お母さんに？ ちょっと照れ臭いよ」

「ははは、無理しなくてもいいのよ」

それから、2人の自転車は、緑橋から公園の外に出た。

隊集会から1週間後、また浜嶋団委員長が団メールを発信した。

「まこと、体験者の連絡だわ。団委員長にメールで体験したい人からの問い合わせがあったの。そこには、2団は英語を使うことと漫才に力を入れていることに興味を持ったんだって」

「やっぱり、英語に興味がある人はいるんだね。その人はどうしてわかったの？」

「2団のホームページを見て連絡してくれたと書いてあるわ」

「ホームページを見てくれる人もいるんだね」

お母さんは、ホームページのどこに書かれたあるのかなと思い巡らした。英語のページは知っているけど漫才はどこに書かれてあるのかなと思った。

「団委員長ね、体験の親子が今度の親子ハイクに来てくれるから、下北副長にどこかで漫才をしてくれるようをお願いするんだって」

「それだったら、僕もそれ見たいよ」

「お母さんもよ。下北副長って頼もしいわね」

まこととお母さんは、英語と友達集めについて、おもしろくなってきたことを実感できるようになってきた。

きっと、まことは、近い将来に外国スカウトと交流することが実現することだろう。

□ エピローグ

まことは、毎日外で友達と遊んでいる。特に近所にある大曾公園は、特別な思いが生まれた。ビーバー隊の隊集会を行うところだからだ。まことにとっては、入学前に遊んでいたときよりも自分たちの公園だという気持ちが強くなった。

著者紹介

浜嶋 鉦一郎

- 1972年 名古屋大学工学部土木工学科卒業
- 1974年 名古屋大学大学院工学研究科修了
- 2010年 株式会社大林組退職
- 1986年 名古屋大学大学院工学博士取得
- 1988年 日本ボーイスカウト大阪連盟吹田地区吹田第19団に入団。団委員
- 1989年 カブ隊デンダッド
- 1990年 カブ隊副長、ちかいをたてる。
- 1991年 ボーイ隊副長
- 1993年 日本ボーイスカウト大阪連盟豊中地区豊中第2団に転団、ボーイ隊副長
- 1999年 カブ隊隊長
- 2010年 団委員長、現在に至る。
- 2016年 ほくせつ地区会計監査、ボーイスカウト豊中協議会事務局
- 1990年 ウッドバッジ研修所カブ課程修了
- 1991年 ウッドバッジ研修所ボーイ課程修了
- 2010年 団運営研修所修了
- 2012年 ウッドバッジ研修所ベンチャー課程修了
- 2017年 団委員上級訓練課程修了